Kintaikyo Symposium

錦帯橋シンポジウム

構造と美

世界遺産としての価値

報　告　書

日時／平成29年（2017年）11月12日（日）
14:00～17:00

場所／岩国国際観光ホテル
ロイヤルホール

シンポジウム当日の様子

発刊にあたって

錦帯橋世界文化遺産登録推進協議会
会長　**村 岡 嗣 政**

錦帯橋世界文化遺産登録推進協議会では、平成２８年１１月の設立以来、錦帯橋の世界文化遺産登録に向けて、山口県、岩国市、関係団体及び錦帯橋世界文化遺産専門委員会と連携しながら、錦帯橋のＯＵＶ（顕著な普遍的価値）についての理解増進や情報発信、世界文化遺産登録を目指す機運醸成に取り組んでいます。

昨年度は、市民・県民の皆様はもとより、県外の方々へ情報発信を行い、１１月１２日には、錦帯橋シンポジウム「構造と美　世界遺産としての価値」を開催しました。

「世界遺産の今と錦帯橋」と題した基調講演では、世界文化遺産に精通されている国士舘大学の岡田教授から、近年の世界遺産登録事情について御説明いただくとともに、錦帯橋の世界遺産登録に向けた課題や国際的理解の獲得方法等について御指摘いただきました。

また、パネルディスカッションでは、世界文化遺産分野の岡田教授、建築分野の東京大学腰原教授、景観分野の早稲田大学佐々木教授、橋梁分野の金沢工業大学本田教授という各分野で日本を代表する４人の研究者をパネラーとしてお招きし、錦帯橋世界文化遺産専門委員会委員長である熊本大学大学院の小林特任教授の進行のもと、錦帯橋のＯＵＶ「構造と美」について討論していただきました。パネラーの皆様から世界遺産登録に向けた克服すべき課題や助言をいただくとともに、会場の皆さんと理解を共有し、その魅力を再確認することができた貴重な場となりました。

この成果を受け、錦帯橋世界文化遺産専門委員会でも議論され、ＯＵＶをさらに強固なものとするよう取り組んでおられます。本協議会としても、暫定一覧表への追加記載、そして、世界遺産登録に向けて、国内外の機運醸成にさらに一層、取り組んでまいります。

終わりに、御多忙の中、本シンポジウムに御臨席を賜りました吉川家当主の吉川重幹様、岩国市名誉市民の澄川喜一様、御登壇いただきました小林特任教授、岡田教授、腰原教授、佐々木教授、本田教授、御後援いただきました関係団体各位、そして、御参加いただきました皆様に心から感謝申し上げます。

目　　次

プロフィール　1
開会挨拶・来賓挨拶　4

第１部　基調講演　「世界遺産の今と錦帯橋」　9
講師　岡田　保良
１．世界遺産はこうして決まる
２．日本登録の世界遺産を振り返る
３．暫定遺産リストとその候補
４．結び―錦帯橋のＯＵＶとその課題―

第２部　パネルディスカッション
「錦帯橋のＯＵＶ（顕著な普遍的価値）について」　23
コーディネーター　小林　一郎
パネリスト　岡田　保良　腰原　幹雄
佐々木　葉　本田　秀行

閉会挨拶　42
参考資料　錦帯橋世界遺産登録推薦書　概要版（案）　44

プログラム

14：00	開会挨拶	村岡　嗣政	錦帯橋世界文化遺産登録推進協議会会長、山口県知事
		福田　良彦	錦帯橋世界文化遺産登録推進協議会副会長、岩国市長
		吉川　重幹	錦帯橋を世界文化遺産に推す会名誉会長 吉川家第 32 代当主
	来賓挨拶	澄川　喜一	岩国市名誉市民
14：15	基調講演　「世界遺産の今と錦帯橋」		
	講師	岡田　保良	国士舘大学教授、日本ユネスコ国内委員会委員 日本イコモス国内委員会副委員長
15：30	パネルディスカッション　「錦帯橋のＯＵＶ(顕著な普遍的価値)について」		
	コーディネーター	小林　一郎	熊本大学大学院特任教授
	パネリスト	岡田　保良	国士舘大学教授
		腰原　幹雄	東京大学教授
		佐々木　葉	早稲田大学教授
		本田　秀行	金沢工業大学教授
17：00	閉会挨拶	佐倉　弘之甫	錦帯橋世界文化遺産登録推進協議会委員 岩国市教育委員会教育長

プロフィール

基調講演者及びパネリスト

岡田　保良(おかだ　やすよし)

1949 年　大阪府大阪市生まれ

国士舘大学イラク古代文化研究所所長・教授

京都大学博士（工学）

専門は西アジア建築史・文化遺産学

経歴：1972 年　京都大学工学部卒業

1975 年　京都大学大学院工学研究科修士課程修了

1977 年　京都大学大学院工学研究科博士課程中途退学

京都大学工学部助手

1980 年　国士舘大学イラク古代文化研究所講師

1995 年　国士舘大学教授

著書：歴史の町並み、近畿篇、中国・四国・九州篇(いずれも共著、日本放送出版協会)、メソポタミア建築序説、門と扉の建築術(共編訳 1985、国士舘大学イラク古代文化研究所)、東洋建築史図集(共著、彰国社)、古代メソポタミアの宗教建築(2000、小学館『世界美術大全集東洋編』第 16 巻)、イラク文化財保護の地平線(共著、2004、東京文化財研究所)、現代イラクを知るための 60 章(共著、2013、明石書店)、世界文化遺産の思想(共著、2017、東大出版会)　など

主な活動：日本ユネスコ国内委員会委員、日本イコモス国内委員会副委員長、文化遺産国際協力コンソーシアム副会長

最近は日本各地で進められる世界文化遺産登録推進活動に参画

コーディネーター

小林　一郎(こばやし　いちろう)

1951 年　別府市生まれ

熊本大学大学院先端科学研究部特任教授

工学博士(京都大学)

専門は景観デザイン・土木史

経歴：1974 年　熊本大学工学部卒業

1976 年　熊本大学大学院土木工学専攻修了

1997 年　熊本大学工学部環境システム工学科教授

2017 年　熊本大学大学院先端科学研究部特任教授

著書：風景の中の橋～フランス石橋紀行～(槇書房)、景観と意匠の歴史的展開－土木建造物・都市・ランドスケープ－(共著、信山社サイテック)、ヨーロッパのインフラストラクチャー(共著、土木学会)　など

岩国との関わり：岩国城下町エリアの文化的景観等検討委員会・副会長(2007-2008)

錦帯橋世界文化遺産専門委員会委員長

パネリスト

腰原　幹雄(こしはら　みきお)

1968 年　千葉県生まれ

東京大学生産技術研究所・教授

NPO team Timberize 理事長

博士（工学）

専門は木質構造デザイン工学

経歴：1992 年　東京大学工学部建築学科卒業

1994 年　東京大学大学院工学系研究科修士課程修了

2001 年　東京大学大学院工学系研究科博士課程修了

2012 年　東京大学生産技術研究所・教授

著書：日本木造遺産(世界文化社、共著)、都市木造のヴィジョンと技術(オーム社、共著)　など

岩国との関わり：錦帯橋世界文化遺産専門委員会委員

佐々木　葉(ささき　よう)

1961 年　鎌倉市生まれ

早稲田大学創造理工学部社会環境工学科教授

工学修士(東京工業大学)、博士（工学）（東京大学）

専門は景観論、土木構造物のデザイン論、土木史

経歴：1984 年　早稲田大学理工学部建築学科卒業

1986 年　東京工業大学大学院総合理工学研究科
社会開発工学専攻博士課程前期修了

2003 年　東京大学、名古屋大学で工学部助手
日本福祉大学助教授を経て、
早稲田大学理工学部社会環境工学科教授

著書：ようこそドボク学科へ！―都市・環境・デザイン・まちづくりと土木の学び方―(学芸出版社、共著)、ゼロから学ぶ土木の基本　景観とデザイン(オーム社)　など

本田　秀行(ほんだ　ひでゆき)

1950 年　青森県中津軽郡岩木町生まれ

金沢工業大学環境・建築学部環境土木工学科教授

工学博士(京都大学)

専門は構造工学、橋梁工学、土木振動工学

経歴：1975 年　金沢大学大学院工学研究科修了

1994 年　金沢工業大学工学部土木工学科助手
同講師、同助教授などを経て、
金沢工業大学工学部土木工学科教授

著書：橋梁振動の計測と解析(技報堂出版、共著)、土木技術者のための木材工学入門(土木学会、共著)、基礎から学ぶ構造力学（森北出版、共著）など

開会挨拶（主催者挨拶）

錦帯橋世界文化遺産登録推進協議会会長
山口県知事　　村　岡　嗣　政

皆さん、こんにちは。

山口県知事の村岡嗣政でございます。

「錦帯橋シンポジウム　構造と美　世界遺産としての価値」の開催にあたりまして、主催者を代表しまして、一言申し上げます。御臨席を賜りました吉川家の当主、吉川重幹様、また、岩国市の名誉市民、澄川喜一様をはじめ、本日は関係の皆様に関しては、お忙しい中、御出席いただきまして、誠にありがとうございます。平素から錦帯橋の世界文化遺産登録に向けまして、格別の御尽力を賜っているところでございまして、重ねて感謝を申し上げます。本当にありがとうございます。

さて、本協議会では、関係団体や錦帯橋世界文化遺産専門委員会の皆様方と連携を図りながら、悲願であります錦帯橋の世界遺産登録に向けまして、その顕著な普遍的価値についての普及啓発、そして、機運の醸成を図っているところであります。こうした中、本日、この錦帯橋のまさに袂（たもと）におきまして、世界文化遺産に精通をされております岡田保良国士舘大学教授をはじめ、建築や景観等、各分野で活躍をされています我が国を代表する研究者の皆様方にお集まりをいただきまして、シンポジウムを開催できますことは、誠に意義深く、大変嬉しく思っております。

本日は、これまで専門委員会で議論を重ね、取りまとめられてきました錦帯橋の顕著な普遍的価値につきまして、幅広い分野にわたる専門家の先生方を交えて、議論をしていただくこととなっております。皆様方からは、錦帯橋の世界文化遺産登録に向けました有意義な御意見を数多くいただけることと心から期待しております。協議会ではこの成果を専門委員会での議論に繋げて、世界でも類を見ない独創的な構造と、そして美しい景観美を持っている、この錦帯橋の顕著な普遍的な価値を確固としたものとするとともに、今後はさらに海外の有識者からの意見を広く伺っていきたいと思っております。国際的な評価や共通理解も図りながら、その魅力を国内外に広く情報発信していきたいと考えております。

終わりになりますが、私は本協議会の会長といたしまして、本日、御参会の皆様方の錦帯橋に対する熱い想い、これをしっかりと受け止め、市や専門委員会の皆様とこれからもしっかりと連携を図りながら、まずは、世界遺産暫定一覧表への追加記載、これに向けまして、全力を挙げて取り組んでいきたいと考えておりますので、引き続き、皆様方の御支援、御協力を賜りますように、よろしくお願い申し上げまして、開会にあたりましての御挨拶とさせていただきます。本日はどうぞよろしくお願いいたします。

錦帯橋世界文化遺産登録推進協議会副会長
岩国市長　　福　田　良　彦

皆様こんにちは。

錦帯橋シンポジウムの開催にあたりまして、一言御挨拶を申し上げます。今日は吉川家御当主、また澄川先生におかれましては、大変御多忙の中を、御出席いただきまして、ありがとうございます。また、御来場の皆様におかれましても、平素から行政市政をはじめ、錦帯橋の世界文化遺産登録に向けての各取り組みについて、格別なる御力添えを賜っておりますことをこの場をお借りしまして、厚く御礼を申し上げます。ありがとうございます。

先般、錦帯橋の専門委員会の先生方におかれまして、普遍的なこの錦帯橋の価値につきまして、その内容を取りまとめていただいたところでございます。今日はこの会場の後方にもですね、1/5スケールの錦帯橋を組み立てておりますが、改めてこの錦帯橋独自のリブアーチ、この構造について、まさに木、石、鉄、この組み合わせの素晴らしさ、これを実感できるところでもございます。

今日はこの後、小林先生をはじめ、先生方におかれまして、パネルディスカッション等を予定させていただいておりまして、色々な専門家からの貴重な御提言、またお話が聞けるものと期待をしているところでありますので、どうぞよろしくお願い申し上げます。

実は、11 月 10 日、11 日、12 日と、今日は最終日でございますが、錦帯橋を中心といたしまして、錦帯橋の「芸術祭」を催しておりました。その最後のイベント行事がこのシンポジウムでございますが、昨日、初の取り組みといたしまして、錦帯橋の上で岩国市歌を歌うという企画をさせていただきました。約 700 名の方々に御参加いただきまして、橋の上で岩国市歌の日本語バージョン、そして英語バージョンを合唱させていただきました。そして橋の袂には、篝火（かがりび）をたきまして、幻想的な錦帯橋が浮きあがったわけでございます。まさに、岩国市文化芸術創造都市宣言。この中で、錦帯橋を中心に様々な文化の圧倒的芸術、これを発信していこうと考えております。これも本市名誉市民の澄川先生のほうからも色々なアドバイスをいただいて、錦帯橋の取り組み、まちづくり全体にこれをしっかり活かしていこうということで、今回初めて企画をさせていただきました。

また、今日は、色々な資料を皆様方にもお配りをさせていただいておりますが、錦帯橋の特色とか個性を国内外に発信するために、錦帯橋ロゴマークの募集を開始いたします。このロゴマークは、今後色々なグッズなどを作成する時に使用していきたいと考えておりますので、ぜひ、多くの方々の応募をお願いいたします。

また、最後になりますが、このシンポジウムのあと、最後にですね、今日も篝火をたこうということにしておりますので、今宵も幻想的な錦帯橋をぜひ堪能していただければと思います。今後とも錦帯橋の世界文化遺産に向けての取り組みにつきまして、引き続きの御支援、御協力をお願い申し上げまして、挨拶に代えさせていただきます。本日はどうぞ、よろしくお願い申し上げます。

錦帯橋を世界文化遺産に推す会名誉会長
吉川家第 32 代当主　　吉　川　重　幹

皆さんこんにちは。

只今、御紹介をいただきました吉川重幹でございます。御紹介に２つタイトルをいただきまして、主催者側、もしくは来賓なのかと、こういうことでお話をしたところ、どうも主催者側の花を付けさせていただくような形になりました。錦帯橋を世界文化遺産に推す会の会長川畑はそこにおりますけど、川畑会長と一緒に頑張っております。一つ主催者側ということで、御挨拶をさせていただきたいと思います。

今日はですね、村岡県知事が会長になられた、錦帯橋世界文化遺産登録推進協議会、なんとも長い名前なんですが、その設立以来、初めての本格的なシンポジウムが開かれるということで、御来席の先生方のお話、ぜひ伺いたいと思って、東京から駆けつけて参りました。

振り返ってみますと、錦帯橋の世界遺産暫定一覧表掲載への活動ということなんでしょうが、これは平成 18 年の「錦帯橋と岩国の町割」と題した提案書の提出が一番最初でございます。平成 18 年ですから、なんともう 10 年以上経っているんですね。この平成 19 年でしたか、文化庁からかなり高い評価をいただいたわけですけど、残念ながら、掲載には至らず、掲載に向けたいくつかの課題というのを文化庁のほうから頂戴をいたしました。この時点では、「この課題さえクリアすれば、世界遺産への登録は無理でも、暫定リストの掲載くらいはすぐにできるのかな」と割と簡単に考えておりましたけれども、実は、それは中々難しい問題でございまして、今日、先生方がお見えいただいているのですが、岩国市では錦帯橋世界文化遺産専門委員会を設置するとともに、これまでに３回、この規模のシンポジウムを開催してきました。

その第１回のシンポジウムというのは、平成 20 年、フランスからミシェル・コット先生、この方はイコモスの委員でもあられて、それから、アメリカからは橋梁の専門家でエリック・デロニー先生などを、岩国にお招きをして、シンポジウムを開いたわけですけれども、その時、コット先生から直接お聞きしたんですけども、「錦帯橋というのは、単体でも十分に世界遺産の価値はありますよ。匹敵しますよ。だからこれは絶対単体で推薦すべきなんだ。」コット先生はそういうふうにおっしゃった。その時岩国市から提出していたのは、例の町割とセットだったんですね。ですから、それから単体に改めて出し直そうという動きになっているということは、まさしくコット先生の御意見が正しかったのかなというふうに思ったりしています。

それで、平成 21 年の錦帯橋世界文化遺産専門委員会の設置を経て、平成 22 年の第２回国際シンポジウム、この時に中国から方ヨウ先生、中国の橋梁の専門家であったと思うのですが、これまた岩国市のほうでお招きになり、要するに、「中国には錦帯橋のような類似橋があるんじゃないか。これはあるか、ないか。」というお話をしていただいたわけですが、方ヨウ先生からは「類似の橋はありませんよ。中国に。」と。これは、要するに錦帯橋の唯一性みたいなものを証明する非常にいいシンポジウムになったのではないかなというふうに思います。

３回目というのが、平成 25 年、錦帯橋シンポジウム in 江戸ということで、早稲田大学の大隈講堂で、行ったわけですけども、澄川先生にも出席をしていただきまして、澄川先生には、錦帯橋に対する想いについて、かなり情熱的な素晴らしいお話をしていただきました。その後に、依田照彦先生から、錦帯橋のアーチ構造について、お声を頂戴いたしました。

「これでまた 1 歩前進したよね。構造もしっかりしてるんだし、唯一性もあるし、なんとか世界遺産になるんじゃないの。」というふうに思っていたのですが、やっぱり中々問題が大きかったようで、未だに暫定リストへの登録もできないという状態で、やや待ちくたびれた感のある岩国市民の中から、錦帯橋を世界文化遺産に推す会をなんとか設立しようじゃないかと、こういう話がありまして、私を名誉会長にいうことに相成りました。

昨年には、村岡県知事が会長になっておられます、錦帯橋世界文化遺産登録推進協議会が設置されまして、ほぼ同時期には、岩国市錦帯橋世界文化遺産登録推進議員連盟、これまた長い名前ですが、これも設立をされて、岩国の市議会議員の皆様の非常に強いアシストを頂戴できる体制が整ったと思います。

ここ 10 年の動きというのは、こんなところじゃないかなと思いますけど、世界文化遺産への新規登録が非常に狭き門になっているというお話も伺います。この中から、このシンポジウムを通して、錦帯橋の顕著な普遍的価値が検証されますことを期待いたしております。御参集の皆様の願いである、錦帯橋の世界文化遺産登録が一刻も早く実現いたしますように祈念いたしまして、簡単ではございますが、挨拶とさせていただきます。ありがとうございます。

来賓挨拶

岩国市名誉市民
澄　川　喜　一

御紹介いただきました澄川でございます。先ほど御当主からの、それから知事さんからのお話がありましたように、私事ですけど、昭和 25 年、随分前です。今日、お出でになっている方はお生まれになっていないと思いますけれども…ここ笑うところなんですけど。昭和 25 年の 9 月 14 日にキジア台風で落橋しました。267 年くらい落ちていない橋が、実は濁流に呑まれてしまいました。その時に、白為旅館のところで私はそれを見ていました。大変なことだなと思って、なんとかこれは将来もう一回復元すべきではないかというように、涙を流しながら眺めていました。それは、理由は色々あると思いますけども、これは再建されましたけど、やはり、技術を伝承しながら、名橋を続けていかなければいけないのが実態だと思います。

それから、その涙が出てくるくらいショックを受けた落橋の場で、私は彫刻家になろうというように思いました。それで東京へ離れて、芸大にやっと入ったんですけど、やはり帰るたびに、錦帯橋は世界に誇れる木造の橋ですから、これはもう絶対再建して、残していかなきゃいかんと強く思いました。

それで、早稲田大学にもお世話になって、ちょっとこういうことを話したんですけど、やはり、市民がまず団結してですね、例えば 20 年毎に架け替え、伊勢神宮は 20 年毎に建て替えてますから、それは絶対守る。それから、それを引き継ぐ職人を育てる。それから、材料を準備するという色々な条件がありますから、それを完全に市民 1 人ひとりが援助して、協力してやれるというようなことを文化庁に我々関係者が言わないと駄目なんです。それが、僕は一番大事だろうと思います。だから、今日お見えになっている方も責任がありますから、これをやってもらわないと、私の思いはありません。

そして、もう何年かで 20 年を迎えると思いますけど、その次の架け替えの時は、私はもうおりません。というような、時の流れをよく考えて、これは継続していって、世界にない橋ですから、これを伝承していただきたいと思います。

どうぞ、長くなりますから、知事も見えています。それから山口県の名橋、それから日本の名橋、世界の名橋とすれば、岩国が生き返ります。ぜひお願いしたいと思います。簡単ですが、御挨拶とさせていただきます。ありがとうございました。

第１部　　基調講演

世界遺産の今と錦帯橋

講師　　岡　田　保　良

（国士舘大学教授、日本ユネスコ国内委員会委員、日本イコモス国内委員会副委員長）

あいさつ・序論

皆さんこんにちは。岡田でございます。まず先程は、澄川先生から、何と言っても文化庁、というお言葉をいただきました。私も文化庁とは懇意にさせていただいております。しっかり圧力になるように頑張りたいと思います。

また、吉川様からは、これまでの地元での活動の経緯を伺いました。実は、私が今、所属しております国士舘大学では、つい先週末、百周年の記念の祝賀会というものがございまして、皆さん御承知かどうか分かりませんが、国士舘大学というのは、その建学の精神は、吉田松陰先生の教えに則っているわけであり、世田谷の松陰神社の傍らに学舎を開いたという経緯がございます。百周年の祝賀会では、センターテーブルに毛利家の代表の方が座っておられまして、来週は岩国にお伺いする旨をお伝えしたところ、「吉川さんのところですね。よろしくお伝えください。」というようなお言葉をいただきまして、こういう繋がりがあるんだということをその時に感じました。

私も、この岩国にございます錦帯橋、かつて吉川家の御先祖が苦労して造られたこの遺産。先ほどフランスのミシェル・コット先生の話もありましたが、これは世界に類を見ないものだということで、たまたま小林先生のほうからお誘いがあって、少しでもお手伝いする機会があればということで、今日お話をお引き受けした次第でございます。小一時間お付き合いいただきますが、よろしくお願い申し上げます。

タイトルは、「世界遺産の今と錦帯橋」ということにさせていただきました。実は、このシンポジウムのメインイベントは後半にございます、ＯＵＶについて語り合おうということで、私自身は、錦帯橋は大好きですけども、その価値についてはまだ十分存じ上げているわけではないので、後ほどの議論を楽しみにしております。その後ほどの議論の露払いといいますか、世界遺産そのものの制度の在り方とか、あるいは日本が今までどんなふうに世界遺産の登録というプロセスに関わってきたかというようなところをお話して、今後の錦帯橋の世界遺産登録に向けての参考にしていただければという趣旨でございます。お話を大まかに、４つくらいに分けておりますが、まず世界遺産という制度の仕組み。

それから、今、日本からは 21 件が世界遺産に登録されておりますけども、その後半、この 10 年ぐらいでしょうか。関係者のいろいろな御苦労があった、ちょっとした裏の話。それから先ほどもございましたけれども、錦帯橋がまず乗り越えなければいけない暫定遺産リスト。まずそういう予備的リストに入らなければいけないので、その辺の話。で、結びとして、そのためにはどうしたらいいかという課題についても、若干触れていくことができるかなと思います。スライドを３枚ばかり映しましたが、私もうまくタイミングをとることができるか分かりません。途中でスキップしたり、早口になったりするかもしれませんが、その時は御容赦いただければと思います。

１．世界遺産はこうして決まる

まず最初に、世界遺産はこんなふうにして決まる、ということを簡単に御紹介します。まず世

界遺産という制度は、ユネスコが採択した国際条約に基づくものだということですね。その条約に基づいて、ユネスコに世界遺産委員会という、これは 21 か国からなる委員会です。その委員会が、何を世界遺産に登録するのかという議論を毎年繰り返して、少しずつ数を増やしてきているわけですが、その判断の基準ですね。何が世界遺産として相応しいかという判断の基準は、いくつか用意されていまして、その基準を満たすものに対して、今日のタイトルにもございますけども、「顕著な普遍的価値」を認めることになります。英語で、Outstanding Universal Value、皆さんも耳にしていらっしゃると思いますが、少し長いのでこれを短くＯＵＶと我々の業界では通称しています。それから、登録、登録という言葉を使っておりますけども、その実態というのは、先ほど申し上げた委員会が一覧表というものを毎年更新していく。そこに新しくＯＵＶを認めた遺産に対して、一覧表に書き込んでいくということで、一覧表に書き込むことを以て登録というように言われているわけです。で、世界中の宝物、あるいは遺産と言われますけども、この世界遺産条約に基づいて登録する物件というのは、あくまでも不動産に限ります。これが一つの原則でございます。不動産と言いましても自然、それから文化、あるいは両方の価値を持つものというように、世界遺産の種類として、条約ではその３種類を決めています。これは 1972 年に採択された条約で、その条約の採択には日本も賛成しているのですが、国際条約というのは、そういう国際機関で採択されたからといって直ちに発効したり適用できるわけではなくて、その主権を持つ国がそれぞれ承認しないといけない。あるいは批准という言葉が使われたりしておりますが、世界遺産の場合は国会承認という形ですね、それがなんと、条約採択から 20 年も遅れました。遅れたという言葉が的確かどうか分かりませんが、日本はしばらく見合わせていたというのが実情です。その影響で、今やイタリア、中国なんかは世界遺産が 50 を超えて登録されていますが、日本はやっと 20 台に乗ったというところです。その辺の差は、条約に加盟したのが遅れた影響であると言えると思います。

世界遺産の登録基準

世界遺産のＯＵＶの核心は、その登録基準にあると申し上げていいかと思いますが、この基準にはどういうものがあるか（図１参照）。元々文章としては長い文章なんですが、簡単に申し上げると、第一は人間の才能、第二は地球規模での文化の交流、第三は古代ないしは長期にわたる文明、あるいは伝統文化の証拠であるとか、第四には建築様式だとか、文化のスタイルだとか、そういう様式として歴史的な段階を代表するというのが、そういう少し難しい観点なんかもございます。それから、環境ないし自然と置き換えてもいいかと思いますが、人間がいかに適応して上手に共存してきたかというような事例も、この価値基準第五に該当することになっています。それから第六に、人類史上極めて重要な事象との関連。これは、原爆ドームを例にすると分かりやすいかと思いますが、原爆ドームそのものに芸術作品なり建築作品の価値があるというのではなくて、あの地域に原爆が落とされるという、人類の歴史上、忘れることので

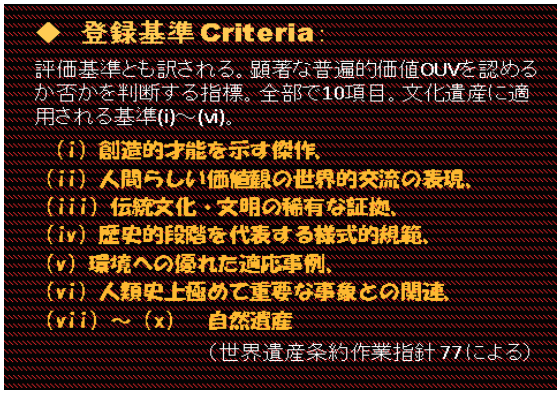


図 1

きない出来事があったわけですね。これをネガティブな遺産で、負の遺産という言い方をされると思うんですが、これを負の遺産というとアメリカからすると都合が悪い。アメリカは最後まで原爆ドームの登録に反対していました。原爆ドームが世界遺産に登録された根拠というのは、人類の忌まわしい原爆とか戦争とかを胸に秘めて、将来の平和を希求するシンボルだという解釈で、少し屈折した論理で登録されています。そういうふうな間接的な根拠ですね。加盟国とユネスコの委員会と、二つの関係する機関を申し上げましたが、もう一つ、実は審査を担当する機関ですね。これは、文化遺産と自然遺産とで担当する組織が違いますけども、私は文化の担当で、長くイコモスという機関に所属して、世界遺産の評価、あるいは日本の国内では推薦書づくりのお手伝いをしています。このように加盟国と世界遺産の委員会と、それからイコモスと、この三者ですね。お互いに支援したり協力したりです。決して仲良くないわけじゃないですよ。三角関係と書きましたが、好ましい三角関係で、世界遺産の、誰しもが認めるようなトライアングルというのが維持されていると理解していただければいいかと思います。

世界遺産における日本と世界の現在

現在、世界中に世界遺産がどのくらいあるのかということですが、今年の７月に新たに 21 件が登録されて、今は 1073 件。その内 830 件あまりが文化遺産で、自然遺産のほうが圧倒的に少なくて 200 件ほどです。35 件というのが自然、文化両方の価値があるという複合遺産です。世界遺産条約としては、この中でも 54 件という、1073 件の中から別立てで危機遺産リストというものが作られています。これは本当に、緊急に支援の手を差し伸べないと、世界遺産としての価値が損なわれてしまうという、究極的には世界遺産リストから外さざるを得なくなるような、そういう危機的な状況にあるものを危機遺産というんですね。ユネスコとしては、このあたりが世界遺産の本質かもしれないですね。今日はその話は置いときまして、日本には危機遺産はありませんので、世界遺産の一般的な話をさせていただきます。

日本は、21 件の世界遺産を保有しています（図２）。そのうち自然遺産は４つ。御存知かもしれませんが、最も最近は沖ノ島とその関連遺産、宗像大社ですね。これが登録されて、21 件になりました。そのうちいくつかについて、どういう課題があったか、あるいは曲折があったかという話をしたいと思います。

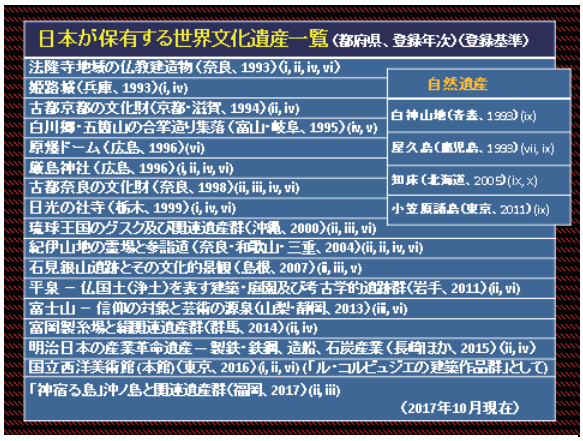


図 2

世界遺産登録のプロセスと暫定遺産

その前に、世界遺産登録の手続きなんですが、この錦帯橋がまず最初に乗り越えないといけないことです。世界遺産の登録をするためには、その資産を保有している国が、まず自分の国から、世界遺産に将来登録したいと考えているどういう資産があるかというリストをユネスコに提出する必要があるんですね。そのリストの提示が無いと、いきなり世界遺産の登録を申請しても受

け付けられないわけです。ですから、まずそのリストに名前を載せることが必要になってくるわけですが、そのことを Tentative List、日本語で暫定一覧表と言っていますが、これを提出する（図３）。現在、日本には９つがこの Tentative List にありますが、一つだけ、一番下の奄美・沖縄が自然遺産、あと８つが文化遺産になります。この中で既に、長崎の潜伏キリシタンの遺産は、現在すでに審査中ですね。それから、来年早々には大阪の百舌鳥・古市がユネスコに申請されることは内定しています。残る遺産のうち、平泉は、もう既に登録されたものを、もう少し数を増やし拡張したいというもの。それから、彦根城は、もう既に姫路城が登録されているので、日本の城の代表としては登録できないので、もんもんとしています。それから飛鳥・藤原は、これちょっと理由がよく分からないものがありますが、奈良にはたくさん世界遺産が既にあるので、更にというところは少し足踏み状態です。それから鎌倉は、１回申請して駄目だったので、ちょっと長期戦のようですね。で、残る縄文遺産、それから佐渡の金山あたりが有力なところだろうと思います。

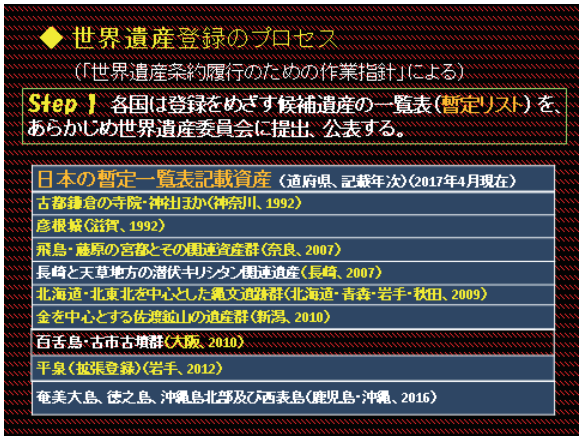


図 3

この暫定遺産について少し付け加えておきたいんですが、今、世界遺産というのは、一つの国から毎年１件だけしか申請できないという条件が付けられています。そのために、その国の世界遺産のリストを見れば、その国の歴史ある文化のおおよそが理解できるというようにあって欲しいと思いますし、元々そういうような趣旨だったはずなんですけども、年間１つというように限られると、なかなかそういうように世界遺産のリストだけでは理解できない。

それと並んで、暫定リストがあります。暫定リストというのは、ユネスコの審査はありません。一つの国が決めれば、そのままユネスコに受け入れられますので、暫定リストというのは、その国の文化的あるいは歴史的なブランドを示す良い材料になるということが一つあります。それから、なかなか暫定リストに登載されるというのが困難という状況が続いているんですが、やはり、まず第一歩が暫定リストですので、そのことによって、その地域の人々は、地域の歴史や遺産に改めて目を向ける。あるいはそれを通じて、視野が一気に海外に広がっているというような効果があるだろうと思います。ただし、先ほど申しましたように暫定リストというのは、その国で決めれば、ユネスコの側からの審査はありませんので、その国によって暫定リストの決め方はいろいろです。我が国の場合は、10 年ぐらい前に文化庁が公募という形で暫定リストへの追加をいたしましたが、それ以降、文化庁は動こうとしていません。ですから、待ちくたびれている世界遺産候補の自治体は、今、日本全国にいっぱいあるわけです。後ほどその話もいたします。

日本はそういう状況です。お隣の中国は、これはかなりシステマチックに暫定リスト作り、更にそこから有力な候補遺産のリストを作る。そして世界遺産に推薦するというのを、すごくシステマチックにやっています。日本は若干難し過ぎて、それが関係者を苛立たせる原因になっている面があるかと思います。しかしこれは、錦帯橋において、何とか乗り越えなければならない第１のハードルだろうと思います。

推薦書

次のステップ（図４）を申し上げますが、まず、暫定リストに登載されたら、今度は推薦書。これは世界遺産申請書と理解していただいたらいいですが、ここで一番問題となるのが、今日のタイトルでもあるＯＵＶ、顕著な普遍的価値をどんなふうに世界の人に理解してもらうかということになります。その文章を作らなければならない。それができれば、もちろん日本では文化庁が今のところ主導権を握っていますから、文化庁の審議会がこれで良しとなれば、その推薦書をユネスコに提出する。これは毎年２月１日が期限とされておりまして、それまでに提出されたものがその後の審査のプロセスに入るということになります。その文化遺産の審査を担当するのがイコモスですね。ユネスコの委員会から直ちにイコモスのほうに推薦書が回され、審査が始まる。イコモスは現地調査、あるいはイコモス内部でのディスカッションを通じて、世界遺産としてすぐ登録していいのか、もう少し資料を追加して欲しいのか、あるいは改めて申請し直すかという、その辺の判断をイコモスからもらいます。そのイコモスの判断が、ステップ４になりますが、世界遺産委員会に送られて、そのイコモスの判断が、一つの議案として、委員会が審査するということになります。最近、イコモスの提案が次々と覆されるということが問題になっておりますが、それが大体毎年６月の末から７月くらいまでですね。ですから、２月の申請から、これは半年じゃないですよ。１年半かかって審査するというものになります。

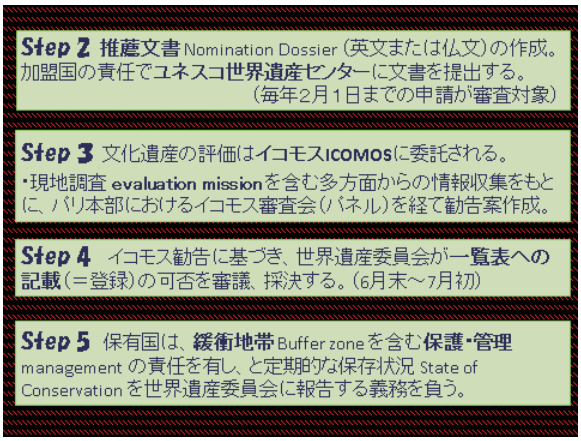


図 4

登録についてはここがゴールなんですけども、それぞれの遺産には、それが決して終着ではなくて、今度はそれを保有する国、実際にはその自治体にとって、登録された遺産の価値を損なわないように維持していく義務が生じるわけですね。その保有している遺産に関しては、定期的にユネスコの世界遺産委員会に報告しないといけない。これはかなり永続的な話ですので、自治体にとっては大きな課題となります。この写真(図５)は、イコモスでの審査風景です。せまっ苦しいところでやりました。

図 5

２．日本登録の世界遺産のこれまで

実際に日本から登録された世界遺産の中で、この 10 年、ちょっと話が前後しますが、初期の、1992 年に日本が仲間入りをして、1993 年に法隆寺とか姫路城とかが初めて登録されましたが、その頃は文化庁がほぼ庁内で推薦書を作って、できあがったものからユネスコに申請して、登録

を勝ち取っていました。だけど、だんだん世界遺産というものの価値が日本国内に広く認められるようになると、たくさんの候補が手を挙げるところが出てくるわけですね。まずその暫定リストを用意しないといけないということで、今から 10 年余り前にその暫定リストの見直しがあって、日本の世界遺産の登録が新たな段階になりました。その新たな段階というのが、これは私の解釈ですけども、文化庁が推薦書を作るんではなくて、それぞれの保有資産を持っている自治体が推薦書作りの主体となり、やはり件数が一気に増えたものですから、平成 19 年、20 年ぐらいなんですけども、暫定リストが一気に増えました。その頃から、国内的にも世界遺産ラッシュみたいなことがありましたが、世界遺産委員会、ユネスコにおいても、日本の推薦する候補が中々すんなり登録されないという苦労の連続が始まり今日まで続いている（図６）。その状況を簡単にお話ししたいと思いますけども、実際には 2007 年の石見銀山、それから、その次の平泉、そして鎌倉、富士山、富岡製糸場、最近では長崎の教会群、そして明治日本の産業革命遺産。こういうものにおいても、それぞれ苦労しておられます。

図 6

図 7

図 8

まず石見銀山ですが（図７）、初めてイコモスは、石見銀山の申請に対して、ＯＵＶが十分証明されていない、もう一度推薦書を作り直せという判断を下しました。理由はいくつかあって詳しくは申しませんが、けれどもこの時は、そのイコモスの判断に対して、世界遺産委員会のほうですね、日本のネゴシエーションと言いますかロビー活動が功を奏して、逆転登録を果たしました。だけども、それがよかったかどうか。その頃は、イコモスの判断、提案が覆されることは決して多くなかった。ましてや延期と判断されたものがいきなり登録になるというようなことは滅多になかったと思います。ただ、この例が悪かったのかどうかは定かではないですけども、それからしばらく経ってからイコモスの判断が次々と覆されるようになりました。もしかしたらこれがきっかけになっていたとすれば、反省しないといけないところがあるかと思います。

で、その次に推薦したのが平泉でした（図８）。最初は、ランドスケープという概念、つまり平泉の文化的景観ということで、平泉のお寺、毛越寺だとか、金色堂だとか、そういうものの他にも、

複数の遺跡、あるいは田園地帯を推薦したんですけども、それには無理があるというイコモスの判断で、また登録延期になりました。だけど今度は流石に、日本も２年続けて強引なロビー活動はできないということもあって、イコモスのこの登録延期の判断を受け入れて、３年後に改めて、こうした構成資産で推薦しました。実は最初の 2008 年、この時は、９つの資産から候補ができあがっていたんですが、それを４つ、あるいは５つと数えるかですが、うんと数を絞り込んで、本当にお寺とか庭園とかに絞り込んで、2011 年何とか登録を果たしました。そのために、今また、その時に除外した部分をまた改めて登録をしようという動きが、地元では続いているわけです。

それから富士山（図９）。富士山は、登録申請をする時のタイトルは単に「富士山」だったんです。その中身を見てみますと、実は富士山というタイトルでありながら、推薦した中身は、山の部分が極僅かなんですね。で、数だけでいうと全部で 25 ぐらいの小さな、地図上で落とすと小さな点、具体的には神社だとか、樹型だとか、あるいは忍野八海という湧き水、そういうものをずらっと連ねて、「富士山」のタイトルで申請しました。だけども、一応イコモスも、世界遺産委員会も登録を認めるということだったんですけれども、富士山というタイトルだとちょっと違うんじゃないか、富士山というのならもうちょっと、山の景観全体を大事にしろというような言い分もありましたし、実際の申請内容を見ると、富士山を神として見ていたわけですね。聖なる山という見方で、ですから神社もたくさんあるわけです。更にもう一つ、富士山を登録した根拠としては、富士山を素材とした芸術作品、特に有名なのは、浮世絵の北斎の富嶽三十六景なんですが、その絵に直接的な価値がある。富士山はその間接的な素材だと。そういうことから二つの要素、信仰と芸術、両方が富士山の価値を主張するので、それはちゃんとタイトルに明記しろという注文が付きました。更には、国際的な世論と言いますか、大多数がやはり、富士山は山として美しいだろうということで、その美しさを何とか保持しよう。別の言い方をすれば、景観としての富士山を大事にしようという、そういう注文が付きました。そのために、登録の範囲ではないところも含めて、全体の管理計画をしっかりと作りなさい。それから 25 の資産がバラバラにあるということは、世界遺産は全部で一つの価値を表しているのだから、バラバラにある状態はよろしくないので、それぞれの関係をもっとしっかり示しなさいというような課題を突きつけられて、３年後に改めてその保全状況、あるいは追加文書を出せという条件で、かろうじて登録を果たしました。また、皆さん御記憶にあるかと思いますが、最初は、三保の松原は外せというようなイコモスの意見もありました。それは入れるようになったんですが、富士山はいろんな面で、克服すべき課題が突きつけられた事例となりました。価値についてもイコモスから意見がありましたし、現在の保全状況についても説明を要するというような課題が突きつけられました。

図 ９

鎌倉も一緒に申請したんですが、鎌倉は残念ながら、国内的な価値はあるかもしれないけども、国際的な、いわゆるＯＵＶが証明されていない、世界遺産としての価値は証明されていないというイコモスの判断が公にされた段階で、日本政府は申請をしなかったという意味で取り下げとな

って、現在また出直しを図っているところです。

富岡製糸場に至って、ようやく文化庁の記者会見の時の言葉で、満点の評価をいただいたというようなことを言っていました（図 10）。富岡製糸場、皆さんこの名前は御存知でしょうが、実はその他にも３つの史跡がくっついていることは、あまり御存知ないかもしれない。実は、富岡製糸場が世界遺産として、その価値を認められたその背景に、良質の繭を供給するシステムが用意されていたのです。それから、その蚕の卵を保存する石室が山間にあったとか、こういういくつかの、複数の要素を一つの資産として統合する形で富岡製糸場は世界遺産に登録されています。それから富岡製糸場でのＯＵＶの評価の一つというのは、フランスから技師を招いて、造らせた工場建築ですね。そのフランス人流の設計図に基づいて造ったということがあって、日本と西洋との交流の産物だったということも富岡製糸場の評価の大事な視点です。それからもう一つは、さっきも申し上げたのが、いくつもの資産が有機的に、効果的に結びついて、一つの製糸システムというものを作り上げている。その点も評価されました。さらには、その製糸業が日本の近代革命において非常に大きな役割を果たしたということが最後に付け加えられました。

図 10

その次の推薦は、産業革命遺産というタイトルが付きました（図 11）。これはずっと産業遺産、産業遺産と言ってたんですが、革命という言葉が間に入りました。これは、この推薦を進めて来られた方々の知恵だと思います。やはり国際社会にアピールするには、単に産業遺産では弱いと。これは産業革命遺産、日本に革命をもたらした一つの産業システム、あるいは三業種ですね。そういうものを主張しようということだったわけで、その三業種というのは、製鉄・製銅、造船、そして石炭産業、という３つの近代産業をセットにして、日本の産業革命遺産と言い、日本はその３つの産業によって、およそ半世紀ぐらいの間に世界中の先進的な近代国家に成長すると主張しました。その面が、顕著なＯＵＶとして評価されているということです。ただ、これは今も苦労が続いていることなんですが、資産の数としては、軍艦島とか三池炭鉱、あるいは伊豆韮山の反射炉、この近くでは北九州の新日鉄、長崎の造船所と、たくさんあるんですね。23 個を数えます。これは、日本中に展開してるんです。一番北は岩手県の橋野町にある幕末の製鉄所ですね。これが、構成資産に入りますが、岩手県から南は鹿児島、島津家が苦労した近代化の施設。そういうものが含まれます。それを一体として、それで一つの世界遺産ですから、それぞれの結びつき、日本の産業革命において 23 の施設がそれぞれどのように貢献したかとういうストーリー作りが必要でした。同じようなものがあったら、どちらかを

図 11

採るということで、炭鉱も、三池炭鉱だけではなくて築豊の炭鉱もありましたが、それは除外しています。選択もしましたし、ストーリー作りも非常に苦労しています。また、この特徴は、企業が今も保有して、企業活動、製鉄とか、造船に供している施設が含まれています。そのために、そこには文化財保護法を適用することは難しい。だからといってそれを除外したのでは産業革命遺産が成立しない、ということで、文化財保護法によらないで、なおかつ世界遺産としての価値を維持し、担保するようにしないといけないということで、実はこの産業革命遺産だけ、文化庁は一歩退いて、内閣官房が主導で世界遺産登録を果たしました。ですが、先ほども申しましたが、世界遺産は登録がゴールではないわけでね。恐らく今、内閣官房では、ああ、世界遺産なんてもう二度と嫌だって思ってるんじゃないかなと思います。

そして、今年ですね。登録を果たしたのは、宗像・沖ノ島という名前で呼んでいますが、実は日本から推薦した宗像・沖ノ島の中身というのは、下の写真は沖ノ島ですね（図 12）。ここには、海の正倉院とも言われる古代の海の神様に祈りを捧げた遺跡が、祭祀遺跡と呼んでいますが、そういうものが手つかずの状態である。その辺は、誰もその価値を疑わないところなんですけども、この沖ノ島をきっかけとして、その後、宗像大社という形で、九州本土側に中津宮、辺津宮というお宮ができ、そしてその３つのお宮の横に古墳群があって沖ノ島の祭祀を支えたというストーリーがこの沖ノ島では作り上げられて、世界遺産に推薦された。だけども最初のイコモスでの価値判断は、この島だけだと明確に言ったんですね。実はこの島というのが、誰も立ち入ることができないという、唯一神主さんがひとりだけいるというような島ですので、経済効果が望めるような遺産じゃないんですね。ですから、地元ではかなりショッキングなイコモスの判断だったと思います。それで、しかし黙っていないわけですね。福岡県と文化庁、更には外務省が動き、世界遺産委員会の本番、今年の７月始めだったと思いますが、日本の思い通りの、全ての候補資産が世界遺産として認められました。私もイコモスのメンバーのひとりでして、ちょっと強引かなという思いも一方にあって、嬉しさもあり、というところでした。

図 12

３．暫定遺産リストとその候補

このあたりが今までに登録されたものですけども、これから登録されようとしているもの、特に暫定リストに既に登載されて順番を待っている遺産がいくつかあります。既に長崎に関しては、推薦手続きを終えて現在審査中です。問題は、最初は長崎の教会を世界遺産にということだったんですが、教会建築そのものに価値があるとはとても言えない。むしろ江戸時代に、隠れてキリスト教を今日まで伝えてきた、その隠れていた時代に価値があるということで、その証拠を出さないといけないという点にあります。集落とか遺跡とかが中心となるわけですが、その審査が現

在行われています。間もなく、文化庁と福岡県のスタッフがパリに出向いて、イコモスの審査、ヒアリングを受けるという段取りになっています。うまく乗り切って欲しいと思います。

で、来年早々には、百舌鳥・古市の古墳群が推薦されることになっています（図 13）が、ここも決して見通しは甘くないです。一つは、その大半がお墓です。しかも天皇陵です。文化財保護法上は文化財ではないわけです。ですから、保存する責任が国にあり、その責任を文化庁が果たし得るかというところが微妙です。それから御覧のように、古墳群の周りは環境が古代とはガラッと変わって、現在は市街地です。こういう環境が、果たして世界遺産として相応しいかどうかということも問題視されるかもしれません。今、最終的に提出する推薦書作成の最後の段階になっています。

図 13

それから、その次に有力なものとして、この佐渡の金山（図 14）。すごいですね、江戸時代に大きな山を断ち割って金の鉱脈を探し続けた。そういう遺産です。この佐渡の金山は、江戸時代だけではなく、近代にも金の採掘が続けられて、近世から近代にわたって一つの金鉱脈を探している。そして、それによって、鉱山社会と言いますか集落が発達したのです。現在も相川という集落には、金生産の名残がたくさん残っているわけです。それから近代の遺構、これをセットとして推薦しようとしています。人によっては近世だけに絞れという意見があったりして、少しぐらついているところがあります。それと、もう一つは、石見銀山は登録したから、金山は後回しでいいじゃないかという議論もあったりします。

図 14

で、金山と競合しているのが北海道・北東北の縄文遺跡群です。ただ、縄文遺跡は日本中にあるわけで、北海道・北東北で縄文の文化を代表していいのかという議論があります。ぜひ、縄文の遺跡は、日本から世界に発信したいところではありますけども、地域を非常に限定しているという問題があります。

ここまでは、暫定リストに既に登載されている遺産です。この他にも、これから暫定リスト入りを心待ちにしているところ、つまり、私達の、錦帯橋を暫定リスト入りさせたいという思いと同じ思いをしているところのお話です。あんまり時間もありませんので、写真だけ紹介いたします。これは、お城です。日本には国宝５城といって、姫路城は既に登録されているので、残り４城がなんとか、姫路城を巻き込むか、あるいは姫路城とは違った理屈で登録させたいというように、今、かなり真剣に取り組みが進められている（図 15）。

それから、閑谷学校という、国宝を持つ近世の学校遺産ですが、これは水戸の弘道館が中心に

なって、岡山の備前市と、栃木の足利市に呼び掛けて、更に九州の日田市にも呼び掛けて、4市で一緒にやっていこうという進め方をしています（図 16）。

更に、京都では、京都には既に世界遺産がありますけども、茶畑の景観、あるいは茶文化、茶の生産の伝統というものを登録したいという意向があります（図 17）。

それから、富山県では、少し難しいかもしれませんが、常願寺川という川、これは富山平野に何度も何度も土砂災害を起こした川です。これをコントロールすることが近代富山県最大の課題だったわけですね。その一つの方策、選択した方策が砂防ダムなんですが、既に日本の重要文化財に指定されています。富山県知事の先導によって、世界遺産を目指しています（図 18）。

それから、ユニークなところでは、四国八十八箇所ですね。これは四国四県が一緒になって頑張っています（図 19）。

それから、少し忘れかけているんですが、私は非常に有力だろうと思っていますが、信州妻籠の宿場（図 20）。これは、実際には新しく造られている家が多いので、建築史の専門家からは若干批判的ですが、しかし、日本の伝統的な文化としては外すことはできないものだと思いました。

その他、天橋立とか茶室、あるいは東京の代々木のオリンピックプールだとか、この近くだと出雲のたたら遺跡とか、金、銀があれば銅の鉱山であるとか。そういったところが、今、暫定リスト入りを狙っていたり、待ち望んでいるというところです。

図 15

図 16

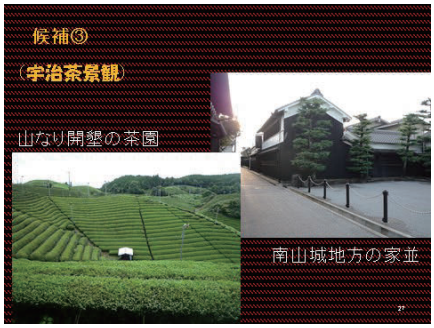


図 17

図 18

図 19

図 20

４．結び―錦帯橋のＯＵＶとその課題―

錦帯橋のＯＵＶについて

さて、最後に、錦帯橋のＯＵＶのお話を少しだけさせていただきます。後ほど具体的な議論が

あるかと思いますが、私のほうからは一般的な話をいたします。錦帯橋が恐らく直面するであろう問題を少し申し上げておきます。一つは、ＯＵＶがどこにあるか。錦帯橋は今現在、日本の文化財保護法上では名勝としているんですね。橋そのものの構造とか、橋そのものの歴史に価値があるという見方を、日本の法律、文化財保護法では示していないわけです。だけども、おそらくＯＵＶで、今日もあるかと思いますが、錦帯橋の価値というのは、本当に橋そのものだと思うんですが、この辺、文化庁はどんなふうに応えてくれるだろうかということがあります。名勝のままより、重要文化財になるほうがより明確なんですけども、そうすることは可能なのか。

それから、これは重要文化財になるかどうかにも関係しますけれども、世界遺産は、普通は、造られた時のまま残っているものを理想とする。それこそＯＵＶの本質であると言えるわけですが、御承知のとおり、錦帯橋は何度も造り替えられています。だから真実性という意味では、少なくとも 17 世紀に初めて造られた橋と今の橋とは違うんですね。だから、17 世紀の錦帯橋を以て、現在の価値そのものというわけにはなかなかいかない。

完全性については置いておきますが、あと、錦帯橋が持っている構造的、あるいはその歴史的な価値が、海外のイコモスなり、あるいは研究者達にどれだけ理解されているのか。私も錦帯橋の構造的、あるいは力学的な原理はなかなか理解できないところもあります。これを世界中の人にどんなふうに理解してもらえるだろうかと。特に下から見た、この複雑な木組みですね。鉄もたくさん使っています。この辺を世界の人達にどう理解してもらうかということ。実は、錦帯橋が名勝に指定されたのは、大正 11 年ですね。そこに書かれている内容を少し、漢字と片仮名混じりの難しい日本語になっていますが、簡単に言えば、橋そのものに価値があると書かれているんですね。だけども、何で価値があるかっていう、ここはよく分からないところなんです。湾曲の度が少しなんとかって書いていますが、ここからは何で名勝と結論づけられたのかちょっとよく分からないところがあり、現在では、名勝の範囲は橋の部分から上流下流にと広げられています。だけども、我々は、あるいは関係者は、橋そのものの価値で推していったほうがいいんじゃないかというような意見の中から、こういう形となっています。

その錦帯橋が適用されるべき評価の基準として、評価の基準がいくつか挙げられましたが、その中で、人間の作品として傑作であるということと、やはりあの複雑なアーチ構造ですか、そういう科学技術の集合体としての評価という２点が中心になってくると思うんですね。ただ、そこで問題になるのは、その真実性の条件を、どういうふうに我々は判断すればいいのか。形、材料、機能や用途の問題、技能・伝統、セッティングと、いろいろあります。特に大事な点は、現在の錦帯橋は何度か造り替えられていると言いますけど、そこに適用されている技術は、17 世紀の技術・工法をそのまま踏襲している。そのことに我々は価値を主張したいと思うんですけども、そうですね、技術そのものに価値があるという見方は、実は世界遺産の今までの考え方とはちょっとずれるかもしれません。やはり世界遺産は、今、残っている実体そのものに価値があるというように、つまり歴史的に古いものに価値があると考えるのが根底にあるので、技術だけを捉えて、そこに価値を持ってくるという主張はなかなか難しいものがあるのかなと。その辺は、この後の議論の中心になってくると思います。

結び

最後に、ちょっと錦帯橋を離れて、我々はなぜそんなに世界遺産にこだわるのかということを少し申し上げたいと思います（図 21）。やはり世界遺産の事業、ないしそこで主張する内容というのは、我々は日本文化そのものを世界中に発信するという、そういう意味が非常に有効な手段なんですね。それから、先ほども少し申し上げましたけども、その地域の人達が改めて自分達の歴史や遺産に目を向ける、そして、未来に向かって国際的な感覚を広げていく、その非常に大きなきっかけになるかと思います。国際化とかグローバル化とかっていう文言が飛び交っていますけども、やはり、その非常に具体的なきっかけになるものが世界遺産だろうというふうに思います。そして究極に、そのことが世界中に目を向ける、そして世界にはいろいろな世界遺産がある、多様な文化がある、多様な民族が、国家が、ということが自ずと伝わってくる。そのことが、世界中の異文化理解、異なった文化に対する理解、あるいは平和共存という崇高な理念にも繋がっている。それこそが、ユネスコが設立された時の基本的な理念でもある。そういうような世界遺産の意味というのを忘れないでいきたいと思います。ただ、最後に、世界遺産というのは登録がゴールではなくて、その価値を維持し、我々は育てていかなければならない。それは決して容易なことではないわけですね。おそらく岩国市、あるいは山口県では、人材的にも、予算的にも、毎年毎年大きな負担がかかってくるかと思います。それを、理解し支えていくのが皆様方、地域の人達だろうと思います。ですから、世界遺産になるには、住民にもそれなりの覚悟が必要だろうと思います。

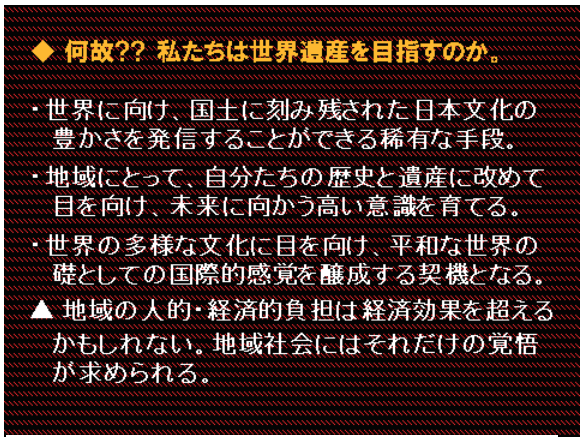


図 21

ちょっと急ぎ足のお話になってしまいましたけども、私のほうからの錦帯橋に関するお話は以上とさせていただきます。どうも、御清聴ありがとうございました。

第２部　パネルディスカッション

錦帯橋のＯＵＶ(顕著な普遍的価値)について

コーディネーター	小林　一郎（熊本大学大学院特任教授）
パネリスト	岡田　保良（国士舘大学教授）
	腰原　幹雄（東京大学教授）
	佐々木　葉（早稲田大学教授）
	本田　秀行（金沢工業大学教授）

熊本大学大学院特任教授　小林　一郎　氏（以下、「小林」）

こんにちは。時間も押しているので、早速パワーポイントを出してください。それで、皆さん、この冊子（巻末、参考資料）があると思いますけど、それを常に手に持っておいてください。これが、ＯＵＶの基となる文章です。

さて、それで、先ほど吉川さんおっしゃったみたいに、10 年前に、フランスの先生とアメリカの先生に来ていただいて、もう錦帯橋は世界遺産をとったも同然みたいなシンポジウムをやった記憶があるんですけど、皆さん覚えておられますか。もし見られた方、参加された方がおられたら、挙手を――はい、ありがとうございます。それから 10 年、我々は遊んでいたわけではなくて、言いわけするなら、暫定リストの公募がありませんから、リストの公募があるまでずっと待つしかないという状態でした。ところがその間に、岡田先生の御講演の後半に紹介があったように、いろんなところがいろんな形で、新たな世界遺産の考え方を入れながらまとめが入って、例えば足利は、昔は足利学校だけだったのに、明治期の学校教育なんていう新しい視点が入ってきて、いろんなことが始まっています。我々としても、ずっと勉強ばっかりしていてもしょうがないんで、今回、世界遺産の推薦書というものを書くことにしました。これはもう、我々が書けばいいっていうものじゃなくて、いろんな方が手を入れてくださるんですけども、まず推薦するとしたらどんな書類になるのか、という。これは極めて分厚いものです。それの概要版（案）というものを作りました。それをお示ししたのが、今日のこの資料（巻末、参考資料）です。写真は付いてないんですけど、４枚ぐらいの文章がそこに書いてあります。それについて少し議論をしていきたいと思っております。その文章は５つからできていて、資産の概要、登録基準、完全性、真実性、それから保護と管理に必要な措置というようなものです。次のスライドをお願いします。今日やりたいのは、まずは皆さんにそれを読んでいただいて、少しいろんな御意見をいただきたいということもあります。ただし、最終的にやりたいのは、世界の誰が読んでもわかるように、これは世界の財産だということを伝えられるような文章に完成していきたいと。そのために、今日４人の、本当にいろんな分野の専門の方に来ていただいて、いろいろ御批判いただくことはありがたいことですから、ちょっとへこむぐらいな議論になってもいいかなと思っています。それを経て、この推薦書が、より早く、より良いものになるように、考えていけたらなと思っています。はい、次のスライドをお願いします。それで、主に先ほどの基準のｉのところにあるんですけども、全体構造と言いますか、錦帯橋そのものの構造について少し分析したいと。それから、２番目は、錦帯橋の最も大事なところですけども、今のところ「錦帯橋式リブアーチ」と書いてありますけども、これは木組みのところですね、そこについてもう１回確認したいと。それから、先ほどの岡田先生の御講演の最後にもありましたけど、物が残っていない物の価値をどう示していくかということで、やっぱりそれは、ここに技術伝承って書いてありますかね。用意したスライドをお見せしますので。この橋の不思議なところですけど、簡単に言うと、アーチ橋と桁橋とが一体になっている。こういうのって近代の、吊橋なんかそうですよね。吊橋があってアプローチの橋がある。こういうふうな、極めて近代的な橋の形をしています。だから複合形式です。だから材料が、これはここの橋の一部だと思ってください。護床工があって橋脚があって、木と鉄でできたアーチのリブがある。それから、

路面も普通はアスファルトとか木だけとかですけど、木、石、木、石、という非常に面白い路面の構成になっています。これは、佐々木先生にも御指摘いただいたことです。はい、次。この全体を遠くから見るとこういう形で、これは非常に優しい、滑らかなアーチなんですね。はい、次。これは、アーチと考えると、この全体の長さとライズ、こういう縦と横の比を、こういう比率で表すとすると、仮に丸いアーチを 0.500 とすると、次をお願いします。究極はこれで、0.060 ぐらい。これは石橋です。こんな扁平なアーチがあります。次のスライドを。これがその倍くらいかな。で、アーチという観点で見ると、実は錦帯橋っていうのは、パリのコンコルド橋とほとんど同じ姿をしていて、石橋がこれに辿り着くのに 2000 年かかっているわけです。これができたのは 1791 年ですから、非常に、錦帯橋と比べたら 100 年以上遅い。100 年以上後にこの姿はヨーロッパに出ます。それがもう既にここにある。これはものすごい価値じゃないかなと思います。はい、次。遠くから見るとこういうことですね。近づくと、次、お願いします。ものすごく反り上がる。あんなに扁平に見えたのが、こんなにぐっと上がっているということですね。で、近づくと、さらにこれだけ複雑で、上から見ると全然、下と上とは違う表情になる。こういうことです。はい。だからリブアーチのことですけど、これはもう、こういうアーチの構造をした時と、全く同じように見えます。はい、それで、ここの細かい話は、腰原先生、少し後でコメントいただければと思います。はい、次。これは下ですね。こういう形で、鉄がいっぱい入った形です、ということです。で、技術伝承のところはこういう、昭和と平成で大工さんが入ります。で、市役所をここで入れたのは、大工さんだけいればできるんじゃなくて、やっぱりここに発注する人がちゃんと、正しい発注をしてくれないといけないっていうことです。それから、技術伝承という意味では、これは図面が 12 枚残っていて、その図面を通して実は、技術は確実に伝わっているということをうまく説明できるように今なっています。

はい。では、４人の先生に今から少しコメントをいただきたいと思います。この上に書いてあるのはたいしたことではありません。さっきの３つの議論のポイントで、主にこんなことを話してくれたらいいかなという程度です。もし可能であれば、会場からも御意見をいただきたいと思っています。

それでは、パネリストの皆さん順々に。まずは本田先生から、少し錦帯橋の橋としての特徴等をお話しいただければと思います。

金沢工業大学教授　本田　秀行　氏（以下、「本田」）

本田でございます。私は橋の構造屋として、ひとこと御説明いたします。これは、世界遺産になっている橋の例ですが、石や鉄の橋ばかりで、木の橋はありませんという意味です。はい、次を、これもそうです。はい、次。私はこういうことで、錦帯橋の構造が非常に複雑で、他に類のない型式になっていますので、それは唯一性と考えることができると思います。しかし、その唯一性を我々が認識しているだけでは駄目と思います。我々以外にも海外の多くの人が理解できる、あるいは海外の人にも説明できるようなことが必要ではないかと思います。これはですね、錦帯橋の構造形式は何ですか

といった時に、きちっとフィットするような正確な名称が無いのです。だから、例えば「錦帯橋式」とか、あるいは「錦帯橋式ソリッドリブアーチ」とか「錦帯橋式アーチ橋」とか、我々がわかるような、海外の人にもわかるような名称がやっぱり必要なのではないのかと思います。

はい、次。錦帯橋は御存知のように、1673 年に創建されました。この当時は、石の桁を伸ばすような構造で石橋ができます、というのを知っていたと思います。しかし、少なく見積もっても橋の長さが 30 メートルにもなりますから、石橋では造れないのではないか。やはり木橋でないと造れない。また、川の中に何個かの橋脚も立てて木の桁を架けなければならない。それには無理に近い問題を解決する必要があります。それでは、この問題をどうしたらいいのかという話になります。はい、次。そこで、これは全く私の個人的な考えですけど、この当時、全国に刎木橋というものが至るところにあったようです。例えば山梨県の大月市の猿橋が有名です。そこに、棟梁さんは視察に行っていると思います。この猿橋は、百済の渡来人の志羅呼（しらこ）という韓国人が造ったと言われていますけれど、ここにあるように、岩壁があって、そこに刎木という桁ですね、桁を斜め上方向にいっぱい並べて、桁にかかる荷重に対しては岸壁でその反力を吸収するという、構造になっています。これはですね、はい、次。我が国の独自の技術なのか、あるいは外国から入ってきた技術なのか、これはどっちなのであろうかという話です。ところが、中国にも韓国にも木の文化はあまりないのですね。ですから、石橋なのですね。これは、どうもここにあるように、仏教の伝来とともに、中国や韓国から、経典とか様々な文献とかがいろいろ日本に入ってきて、少なくともそれらの知識で造られたのではないかなと思います。当然、猿橋は韓国人が造った。それで、この写真は、今日初公開ですけども、ネパールの山奥にある、猿橋の原型がまだ一体的に残っています。これは私の考えです。この猿橋の起源は、ネパール、チベット、あの辺ではないかと思っております。仏教の伝来とともに、悠久な時間の流れで我が国に伝わり、猿橋と同じ構造の木橋が、例えば江戸時代前半に富山県宇奈月地区に建造された愛本橋のように、全国の各地に造られるようになったと思っております。

猿橋と比べて見た時に、錦川の両岸は土手で岩壁がないですね。それだったら木の桁を岩壁に打ち込めません。ですから、ここの下にあるように、錦帯橋の両側の橋は、その土手を利用して反橋という桁橋にしたと思います。また、川の中に木橋を架けるために巨大な橋脚を川の中に造って岩壁とすれば、猿橋と似たような構造ができるのではないかと考えたと思います。そうすると、錦帯橋は橋脚のところに桁を打ち込んでいるわけですけども、それだけであれば、木の桁は斜め上方向に真っ直ぐ延びていくものですから、30 メートル程の橋の長さを確保することは困難になります。そこで、途中の五番桁から木の桁の角度を少しずつ変えていき、巻金や釘で各桁の全体的に一体化することによって、錦帯橋はリブアーチに似た構造になる。猿橋は刎ね木の構造ですから、真中に吊桁を置いていますが、錦帯橋はアーチに似た構造ですから、アーチ構造を形成するために必要な、石橋でいう頂点に打ち込む楔石に相当する物が必要になります。錦帯橋では、その楔石に相当する部材を大棟木といいます。桁をアーチに組み合わせた後で頂点に大棟木を打ち込み、さらに小棟木を打ち込んで全体的にアーチ構造が完成するという構造です。

このような構造になっていますので、少し計算をしてみました。これは、たわみの実験と計算をやったスライドですが、映らなくなってしまっています。申しわけありません。純粋なアーチ桁には圧縮する力だけが生じますが、計算によれば、錦帯橋の桁には圧縮する力と曲げようとする力や

せん断するような力も生じます。錦帯橋の場合、桁に生じる力を考えても純粋なアーチ構造ではないのです。これは、どんな揺れ方をするかという計算です。これを見ていると、アーチ構造の特徴は出ています。しかし、完全なアーチ構造とは少し異なる揺れ方をします。

そうすると、錦帯橋の構造としての普遍的価値、真正性に対して、実際にどのように考えていけばよいのでしょうか。もちろん、先ほどからありますように、大棟木、小棟木でアーチを造る。これがアーチの原点です。それでアーチができるのです。それから、後で設置された鞍木の部材です。これは木が暴れるというので、後で付けたらしいのですが、それを振動の点から考えると、桁全体のせん断するような力の強度を高めています。鞍木の設置の効果で、橋の振動が小さくなります。多くの木橋の中で鞍木を設けている例は、錦帯橋だけで、他に例がありません。すごい技術、匠の技です。このような観点から、他に例の無い構造になっていますので、誰しもが認める普遍的価値や真正性のある構造です。

先ほども建設の技というので、技術は評価の対象とならないと。しかし、型木の伝承とか、棟梁とか大工の研鑽と伝承、古くからの製造技術で錆びない和釘や巻金なんかもいっぱい使っています。それから、木を加工するのこぎりやかんなも非常に高度なものを使用しています。それらの技は確実に伝承されていえると思います。

錦帯橋がどのような影響を海外に与えているのでしょうか。例えば、葛飾北斎の絵が、フランスの画家に大きな影響を与えたことは良く知られております。実は、錦帯橋は外国の橋梁の専門家に影響を与えているのです。これはドイツのデェートリィヒさんという、非常に有名な木橋の設計者ですが、この人が言っております。「自分の木橋の師匠は錦帯橋である」と。錦帯橋を何回も見に来られています。この写真の橋を設計した人ですけども、ドイツのミュンヘンのイザール川に架かっている橋です。最初にこの橋を見に行った時にびっくりしました。イザール橋と別名で言いますけれども、こういう人も海外にはおられます。こういう人に、錦帯橋を海外に広げる役目をなんとかして欲しいと思います。

ですから、これをまとめますと、錦帯橋に関しては、他に例の無い高度な技術の技、匠の技が確実に伝承し、つまり芸術的な木の文化の伝承と継続がなされているということに大きな価値があると思います。

小林　はい、ありがとうございました。腰原先生、お願いします。

東京大学教授　腰原　幹雄　氏（以下、「腰原」）

東京大学の腰原です。私は専門が建築ですので、木造建築から見た錦帯橋の話を少しさせていただきます。錦帯橋は1673 年に造られているわけですけど、この時代にいったいどんな建築物ができていたのかと言いますと、この辺で言いますと松江城とか岩国城とかの城ができていますし、現在の出雲大社っていうのはこの頃ですね。それから、広島のほうでは国前寺の本堂なんかができてきたり、そこに錦帯橋があって、厳島神社の能舞台とかが出てくるという時代です。この中で言いますと、実は錦帯橋ってあまりメジャーではないですよね、きっ

と。そういう意味では建築、木造建築技術という意味でいけば、この時代には様々な技術ができてきて、様々な建物ができている。ですからそうした技術を活かした中で錦帯橋がどうなってきているかを考えるということになります。一つは錦帯橋というのは日本の町家とかの繊細な木造技術というよりは、城とか五重塔とかの大きな構造物を作るための少し野太い技術が主なのではないかなということになるわけです。そんな技術を見てみますと、本来、継手、仕口という、釘と金物を使ってませんというのが日本の伝統木造の美学ではあるんですけど、太い材を巧く組み合わせていきましょうというところでは、先ほどの鎹（かすがい）とか巻金といった金属を多く使う、これはかなり特殊なことなんですね。この特殊なことがいいことなのか悪いことなのかの説明がなかなか難しい。それから、継手、仕口という木組みの技術としてはそんなに複雑なことはやっていないですね、実は。構造的に一番効くのは「だぼ」と呼ばれる、左下にありますけど、木と木を細かい部材で繋げていくっていう非常に地味な技術なんですけど、これで 35 メートルのスパンを飛ばしているっていうことになるわけです。ですから、これを建築技術だけで見ると、他の建築でよく継手、仕口でピタッと納めているっていうようなすごいことではないですね。でも、構造工学に基づいて見ますと、こういったことはすごく自然なことで、旧史的技術を巧く組み合わせて新しいことをやっていくというのが技術なわけです。ですから、斬新な技術があるから良い技術とも限らないわけです。物の見方というのも複雑です。後ろの展示に、いろいろな樹種を使っていますという表現をしています。適材適所。確かに言い方をすれば適材適所なんですが、木造建築で言いますと適材適所は二種類あるんですね。その性能に見合った材料をうまく振り分けますっていうのと、自然材料なんでその時代ごとに入手しやすい材料で組み合わせて造る。自然材料と付き合うっていうのが木造建築だとすると、時代ごとに樹種が変わってくるっていうことも当然であると思います。ですから、そういったものが、今までの伝統木造建築の技術とちょっと違う評価をしないといけないというのが錦帯橋で求められていることだと思います。

もう一つ大きな違いというのが、300 年間架け続けられてきましたというんですけども、先ほどもありましたように、300 年前の橋がそのまま残っているわけではない。じゃあ、何を残してきたのかっていうことになるわけですね。左側にありますのは、伊勢神宮です。これは宗教的な理由もあって、式年遷宮という 20 年に一度建て直すんだっていうルールを基に守り続けています。一方、右側にあります厳島神社は、洪水とか台風という天災、災害が起きても同じものを作り続けるんだという工夫をしているわけです。錦帯橋も 300 年間規則的にやっているわけではなく、災害対応をしながら技術とか様々なものを残して架け続けているわけです。この写真は前回の架け替えの２年目の写真で、一番左が 50 年前の錦帯橋、真ん中が２年前の錦帯橋、一番右側がその年にできた錦帯橋。ですからこんなふうに、時間と時代が変わっても同じものを作り続けること。ただ、それが必ずしも同じ材料を使っていないというのが、世界的な評価の中ではなかなか説明しにくい。ですから、その辺の日本的な文化の価値観ですね。木という自然材料、耐久性の低い材料を使って同じような構造物を長く、あるいは機能を持ち続ける文化というのは、日本独特かもしれないですね。ですから、世界の価値観に合わせていくのか、それとも日本の価値観をアピールしながら錦帯橋の価値を伝えていくのか。その辺も考えていかなければならないと最近思っています。以上です。

小林　ありがとうございました。佐々木先生、お願いします。

早稲田大学教授　佐々木　葉　氏（以下、「佐々木」）

早稲田大学の佐々木と申します。早稲田大学と言うと、依田先生が錦帯橋とともにずっと歩んで来られたのですが、私は今回声をかけていただいて、ほぼ初めて錦帯橋をじっくり見ました。私は景観工学、景観、そちらの話をしていますので、今日のタイトルでいうと、「構造と美」の「美」のほうの担当になります。いろいろ見てきた時に、錦帯橋の美しさの源っていうのは、異なるものの調和なのではないかなと改めて思いました。つまり、錦帯橋は、木造とか、木製とか、木に注目されがちなのですが、実はしっかりと石があるから木が構造的にも成り立つわけですし、美として見た時にも石と木という違うものがお互いを引き立てあっていると思います。

写真で説明します。これは、両側の桁部分の木の脚の線で構成される部分と、石の脚のどっしりとした部分との違い、コントラスト。中央部分のぽーんと飛んでいく感じも、両サイドにしっかり支えられているっていうのがあるから、余計に飛んでる感じが引き立っているのではないかと思います。

次にこれがやっぱり一番面白いなと思うんですけども、桁裏が非常に複雑で、でこぼこでこぼこしているのに対して、表はとても滑らかで、この表情のまったく違うものを、ある視点から見ると両方同時に見られるんですね。つるつるの滑らかな表の面と、桁の裏側の面を同時に見られる。ですので、今まで描かれている絵図というのは、必ずと言っていいほど表面のつるつるの感じと裏側のでこぼこした感じを書き加えているように思われます。これは、私達が歩くところが弓なりになっているが故に、この見え方ができるということです。

また護床工というものが橋を支えるのに非常に重要な要素になっておりますけれども、これがあるが故に橋を境にして川の表情が180度変わる。護床工がちょっとした堰上げ効果をもちますので、上流側は鏡のような水面になる。でも下流側には波打つ、すごく躍動的な水面がある。この水面も橋の表情を全く違ったものにして見せてくれている。これも何でできたかというと、橋の護床工のお陰なんですね。

木の橋、木の橋と言いながら、鉄がこれほど多様に使われているという特徴もある距離から見えて参ります。今日午前中、私は錦帯橋の５分の１の模型組み立てをやらせていただいてとても楽しかったのですが、その時、巻金に該当するマジックテープのバンドを何個も何個も締めないといけない。つまり、これだけ鉄というものがこの橋に使われているんだということを体験することができました。

そして、それがさらに目を橋に近づけていった時に見えてくる、木に巻かれている鉄、あるいは木の足下を固めている鉄というように、全く違った素材がお互いの性格を引き立て合いながら見事なハーモニーをなしています。つまり遠景から至近距離に至るまで、二つの、あるいは三つの異なる要素がうまくバランスしている。一つの橋の中にこれだけ違ったものの調和によって一つの美を構成している橋というのは、あまり例がないのではないかなということを、この度錦帯橋をじっくり見させていただいて発見し、非常に面白いと思った次第です。以上です。

小林　ありがとうございます。次はこの概要版をざっと目を通していただいた感想を皆さんから一言ずついただきたいのですけど、皆さんがざっと目を通す間に、今のスライドを見ていただいて、なるほどなと思ったことが幾つかあります。特に本田先生のお話では、錦帯橋はアーチではないんだと。錦帯橋式アーチ橋としか呼びようのない、とにかく世界に類のない形式なんだとおっしゃいました。用語に関しては、ここに書いてありますけど、まだ統一が取れていません。海外できちっと一対一で対応する用語になっているかとか、そういうことがうまくまだできてないんですけれど、錦帯橋式アーチと仮に呼ぶとして、そこの部分が一番大事なところですから、そこの部分をやっぱりきちっとやりたいというのを少し感じました。

それから、腰原先生の話の中では、野太い技術というのですか、寺社建築のような細々としたやつではない、どんとあるぞという感じがいいなと。それから、これは今我々がずっと話をしていて、今後どうするか。岡田先生の話にもあったんですけど、日本の木造文化っていうのは独特の価値観でできているんだから、世界の価値観に合っていなかったら日本の価値観をどんと押し出せばいいのではないかという話と、いやいやそんなことしたら試験に通らないんだから、やっぱり世界の価値観に合わせたほうがいいんじゃないかという話もあります。これはまた後で少し議論があるかも知れません。

それから、佐々木先生の話でなるほどと僕は思ったけど、今まで皆さん荒っぽく、美しいに決まっているからごちゃごちゃ言わなくてもいいじゃないかと、僕はいつも言いますよね。錦帯橋は誰が見ても美しいんだからいいじゃないか。ところが、なるほどさまざまな材料がコントラスト、ハーモニーしながら引き立て合っている。それによっていろんな表情が、確かに、晴れの日と曇りの日で全然違う表情に見えますし、近くからでも遠くからでも、上からでも下からでも、いろんな表情があるということの謎が少し解けたような気がします。そういうようなこともぜひ書き込みたいと思います。皆さんお一方ずつで、本田先生から順々にお願いしてもいいでしょうか。これ一回お読みになったと思うんですが、我々の第一回目の答案用紙なんですけども、ざざっと見ていただいて、特に何かお考えがあるかを。簡単で結構です。字が読みにくいとか、そういったことでも結構です。御指摘があれば伺います。

本田　よくできているのではないかと思っておりますが、構造がどうかとかは、後でいろんな問題の中で解決すると思います。しかし、錦帯橋の価値をどう表現して、それをどう説明していくかということが一番大きい問題ではないかと思います。それが日本だけの価値であるから世界の価値に合わせなくていい、あるいは世界の価値に合わせるなど、いろいろな考えがそこにあるわけです。木の文化論だけでなく、特に錦帯橋は総合的で芸術的な木の文化を象徴しているわけですから、日本の文化そのものですね。その辺をどう判断して合格点をもらうかという話と思います。簡単ですが。

小林　ありがとうございます。佐々木先生、お願いします。

佐々木　技術の伝承ということがやっぱりこの中で大きな議論のポイントとなってくると思います。腰原先生がおっしゃった野太い技術っていうのは私もそう思っていて、遠くから見るとものす

ごく優雅ですね、シルエットが繊細で。でもそれは、構造的な合理性が醸し出す数学的な優雅さというか美しさであって、近づいてくると結構荒っぽいんですよね。言葉を選ばずに言うと雑で、がさがさした感じがします。その時に私も思ったのですが、そもそも技術っていうのは何のための技術なのかと。つまり、神社仏閣のような建築は、建築物自身を美しくしていくための技術で、そこに大工さん達がものすごいエネルギーをかけて、ディテールまでどんどん洗練させていく。それはなぜかというと建築物を美しくしていくことが目的だと思えるからです。でも錦帯橋に注がれた技術っていうのは、錦帯橋のために注がれた技術ではなくて、そこを渡る人のために注がれた技術なんですよね。だから人が安全に渡ってくれればそれでいいわけで、裏の構造体が少しがさがさしていても全然構わないわけです。だから、技術の継承という時に、その技術が何に向かっているのかっていうベクトルというか眼差しというものが、錦帯橋の場合たぶん首尾一貫していて、人が安全に渡っていく、人をとにかく向こう側に安全に渡したい、そのために技術は継承されている。ですから流されてしまった昭和の時に橋脚を少し高くしたのも、コンクリートにしたのも、それはやはり人を安全に渡すために必要であったし、架け替えの時、階段口を少し変えたということも人のための技術だったと。そういうコンセプトの継承性ということも一つの論点というか考えていくことになるのかなと思いました。

小林　腰原先生、全体を読まれた御感想をお願いします。

腰原　私は専門委員会の委員をやっているので何度も読んでいるのですが、今お話を聞いてて確かにそうだなと思ったのが、よく見ると装飾が何にも無いんですよね。無いんですけど暇になった時期に擬宝珠を付けちゃったり、余計なことをやろうと思うとそういう装飾に走るという時期もあるので、やっぱり 300 年間、いろんな価値観の基にやってきたんだけど、何か本質的な錦帯橋のものっていうのが残り続けているんだとすると、それをどう評価してもらえるか。きっと、同じまま残せっていうのが今までの日本の文化財でもあるし、世界の価値感でもあるんだと思うんだけど、機能っていうのと時代背景の中で変化をどれぐらい許容できるかっていうことが、錦帯橋が 300 年間架け続けられた理由だと思うんですよね。前々回の架け替えの時に鉄筋コンクリート造にしましょうという案が出ていて、機能を重視したらやっぱりそこにたどり着いてしまうわけですよね。ですから、その辺をどうするのがいいか。全体としてなんとなく、僕は毎回言っていて申しわけないですけど、すごいでしょと自慢するやり方なのか、誰が見てもいいんだけど何か地味ねっていう、そういう戦略ができないかなという気がしてるんですけど。これは岡田先生に聞きたいんですが、やっぱり世界的な人を相手にするには、「すごいでしょ」ということをアピールしまくらないと乗ってこないとか、この文章のトーンは、例えば今すごいでしょということを積み上げていくほうが出ちゃってるんですけど、もうちょっと遠慮がちにというか渋い感じで攻めるというのは、国は納得してくれないんですかねという感想があります。

小林　皆さん怒らないでくださいね。今日、雑とか、地味とか、そういう論調が出てきますけど、ある意味本質的な話ですよね、錦帯橋って実はそういう渡るための道具ですから、決して芸術作品ではないわけだから、それを踏まえて僕らはどっちかっていうとすごいぞ派でいこうと言ってたか

ら、文章の中はすごい派です。世界に一個しかなくてどうだって書こうとしているんですけど岡田先生そのあたりいかがでしょうか。

国士舘大学教授　岡田　保良　氏（以下、「岡田」）

私もすごいぞ派だと思うんですけど、この推薦書案についてですが、評価の視点、ＯＵＶの字句があるところで、基準のｉとⅳという２つの点を採用しようという方向があろうかと思うんですよね。ｉのほうが、特に人類の作品として傑作であるということを強調するわけですが――。

小林　今話しているのは３ページのところです。３ページの、登録基準のｉとⅳを採用しました。ｉのところは「人類の創造的才能を表現する傑作」。傑作だと僕らは言いたい。だから、何をどう傑作と言いたいかと。

岡田　そうです。何をどう傑作かというと、これはさっきどこかで説明されましたが、それを理解してもらう必要があるわけですよね。初めは現地を見ていただけないわけですから、推薦書なり提案書という形で、写真なり文章で説明して、それの理解を得なければならないという、これは一つの宿題。やっぱり一番わかりやすいのはそうだと思うんですよね。そのことによって、希望的には橋を渡ってということなんですけども、同時に美しいものを造っているということも評価しなければいけないと思います。それから、基準のⅳのほうですよね。これは正に技術、これは傑作にも通じるところですけども、17 世紀に遡るような段階で、あれだけの英知を凝縮したような技術、その点を説明しないといけないんですが、図らずもユニーク過ぎて、日本にしかない、錦帯橋にしかないということを強調すると、要するに世界遺産として、どこにも何の効果も影響も及ぼしてないのではないか。それで気になるのは、例えば鎌倉の推薦がイコモスから問い詰められたこともありましたし、つい最近の沖ノ島の推薦の時もですが、日本人にとって、日本国内では価値があるかもしれないけども、インターナショナルな、世界的な人類の歴史ということで評価ができるのかということに対して疑問が出されたということがあります。ある意味ユニークにというと、その点、読んだ人には面白いかなというか、その辺が少し気になるのと、もう１点、技術を評価する時には前段が付くということですね。人類の歴史的な段階を物語るものについて、一種の発展段階というような、人類がいろんな画期を、日本で言えば奈良時代から平安時代、平安時代から鎌倉時代というふうに、画期を代表するような、人類の節目を代表するような技術であるとすごく説得しやすい転換点になるんですけども、そこをどんなふうに、日本の橋梁でもいいし、世界の橋梁の視点でもいいですし、それのどういう段階に錦帯橋の技術が位置づけられるのかというところが説明の中にあったらいいなということを感じました。

小林　ありがとうございました。これは、10 年前のシンポジウムでも実は同じことが言われていて、日本の中ですごいすごいと言ってもしょうがなくて、世界ですごいという以上は、世界のいろんな流れの中のどこにどう位置づけられるかというようなことがいるだろうと。それで、さっきスライ

ドで、川の中をたくさんぴょんぴょん渡っているアーチの形でいくと、100 年後にヨーロッパで実現した姿が、実は 100 年前に木を使うことで実現できているということも、大きな橋梁の歴史の中でうまく説明できないかということがあります。それから、どういう時代からどういう時代に変わる時にこれができたのかというと、さっきの雑の話もそうだけど、戦国から平和な時代に移る境目のところで、正にお侍さんが関係して造っているから、えいやでどんとすごいことが、渡れればそれでいいじゃないかと、ある種軍事的な技術の民生利用の中で、普通はお城とか建物にいくんですけど、ここだけ土木技術という形で展開されているということをもうちょっとうまく説明できないかなと思っていますけれども、確かにそのあたり、真面目な人がたくさんいて、そういう史料が無いんで言えないよねという、どうせ海外に出ればどこの史料にどう載っているか聞かれますから、そのあたりもうちょっといろんな補強がいるかなと思っています。岡田先生、確かにそういう御指摘は、要するに世界の国のルールで、ルールというか世界の価値観の中で、橋梁の歴史の中でどういう意味を持っているかとか、木造の技術の中でどういう流れを持っているかっていうことはもうちょっと丁寧に押さえていく必要があるかなと感じました。あとは、主に技術の話が多かったですけれども、全体構造に関して、要するに橋の姿に関して何か補完を、どなたかコメントがありますか。要はあの形はああだから、こういいんだみたいな話ですけど。本田先生、はい、どうぞ。

本田　石川県の隣の富山県に愛本橋がありました。64 メートルの橋で、明治 23 年までありました。加賀藩の 5 代藩主によって江戸時代の錦帯橋ができる 10 年ほど前に造られました。愛本橋は、敵が攻めてきた時には橋を落とす構造になっております。岩壁から斜め上に 7 本の桁を立てて、上は吊桁にしております。中央で桁が吊られているのです。それを外せば敵は攻めて来れないのです。錦帯橋も実は、大棟木や小棟木をはずせば落ちるのです。アーチを造るという意味もあるけれど、敵が攻めてきた時には、床板を剥がして棟木を取れば、落ちてしまいます。そういう戦略もあったのではないかと思います。

小林　ありがとうございます。一生懸命調べます。他に、佐々木先生どうですか。非常に細かな分析をしていただいて、僕達、目から鱗だったんですけど、結局錦帯橋は美しいよねと、僕は佐々木先生を説得中なんですが、どういう風なキーワードがあるのだろうかというようなことを――。

佐々木　一つは、こんなに橋面がでこぼこしてもＯＫだったっていうのは、結局日本が馬車を使わなかったっていうところで、要するに人が歩いて渡れればよろしいでしょということが、それは圧倒的に古代ローマに始まる西洋の橋に求められていた条件とは違う文化であって、ちょっとアジアのほうまでは見てないですけども、ともかく西洋とは大きく違っていた。先ほど人が渡れればいいというふうに申し上げましたが、その人の概念もだんだん拡大していくわけですよね。創建当時は殿様とか武士とか限られた人しか渡れなくて、町人は渡れなかったという記述をどこかで見ましたけども、それが誰もが渡れるようになってきて、なるほどって思いましたけども、今日の会場の入口のところに車椅子では渡れませんという表示があって、その時に渡りやすくするのであれば、とにかくあの形を捨てて、つまり錦帯橋のアイデンティティを捨てて、平らな橋に架け替えればよかったんだけれども、それはやはり錦帯橋ではなくなるという非常に大きな決断が昭和の架け替えの

時に行われたとも考えられます。その時に、渡るという行為が、上ったり下りたり上ったり下りたりしながら渡っていくという、つまり渡るという行為自体を形が体現しているという意味を見出すこともできます。これは架橋位置、セッティングの問題になるのかもしれませんけど、同じ城下の町であっても、２つの性格の異なるところを繋いでいくという象徴性みたいなものもあったのだと思うんですよね、このアーチには。ですから、あれほどたくさん、いろんな人が絵を描かれて、みんなでこぼこしたところを強調されている。全体のシルエットの中で、路面があれだけでこぼこしている、凸になっているというところのユニークさというのが構造全体の美しさを支える橋が持っている一つの使命とか精神性である、と思います。先ほどは意味的なところを排除して、木と石とか、鉄とか、見えの形だけでのバランスとしての美しさのことを申し上げましたが、美とか全体の価値を言う時には、形としての割とクールな分析としてどう見ているかということと、そこに対してどういう意味性があるのかとか精神性があるのかとか、それを支えていた社会の持っている風土、文化がどうなのかということとの関連でまとめていくことの、両方必要ですが、まだまだちょっと私自身勉強が足りていないかなと思ったりもしています。

小林　わかりました。３ページのところの文章が、絵に描いてるから美しいでしょうではやっぱり駄目で、今おっしゃったようなことを、かなりきちっと分析していかないと。

先生がおっしゃったように、３ページを後で皆さん、ぜひ読んでください。僕らも書ききれてないものだから、遠くから見ても近くから見てもいいよぐらいで終わっていて、なぜって、広重も北斎も描いたもんねで何とか世界に認めてもらおうとしてるとこなんですけど、もちろんそれは概略なんだからこうで、詳細な推薦書の中では、今言ったような形の分析とか、論理的な、どういう意味を持ってるか、渡すっていうことの価値とか、繋がっていることの価値というようなことは、確かにもうちょっときちっと分析しておく必要があるかなと思います。ヨーロッパ人はそういうの大好きですから、確かに重要だと思いました。

それで、あとあまりもう時間もないんですが、これ、みかん食べながらだらだら５時間ぐらいやりたいなと思っているんですけど、あともう 30 分しか時間がありません。それで、幾つか主に岡田先生に聞くべきか、例えば先ほど言われたように、錦帯橋っていうのは名勝指定しかされていない、あるいは文化財指定まで一生懸命頑張って、それからいくかという路線もあったんですけど、文化財になるのに仮に 30 年かかってよければ、それで頑張ってなるけど、物がないものの文化財ってどうするのかってなってくると、それこそ、それ自体が最初の事例ですから、そういった時間がかかるだろうと。だから世界遺産ってそんな細かいとこじゃないんで、できれば法的に守られてるのは名勝だから、そこのあたりでうまくやりたいからということなんです。そうすると、実際は錦帯橋という橋が一番価値を持ってるのに、橋じゃなくて名勝という形になってるというのは、ものすごい、確かにパラドックスです。そのあたり御指摘は有り難いんですけど、答えもいただけると有り難いなあと思ってるんですが、もし何か先生、そのあたりで何か次に進むべきアイデアがあれば。あるいは他の先生でもいいですけど、そのあたり。腰原先生がいつもいろいろとおっしゃってるんですが。それも含めて。

岡田　ちょっと一つ確認なんですけど。私ちょっと不勉強で、これは市の方に伺ったほうがいいの

かもしれませんが、伝統的な大工技術みたいなものは、技術そのものは、日本の文化財審議会で無形の文化遺産のほうのカテゴリに指定しようとすればできることではないかなと思うんですが、そういう方向性はないんでしょうか。だから、名勝と無形の技術とをセットにすれば、これは海外でもかなり説得力を持つかなという気がしたものですから。

小林　市の方どうですか。勉強します、でいいですか。はい。一応、それも踏まえて、仮に文化財になるとしたらどういう資料をどう用意しておくかとかいうような話は別個に今、委員会立ち上げて、今日も何人か見えてますけど、そういう資料の準備とか、図面が何枚あってその図面の中に何がどう記されているかというところで、今一生懸命やっていただいています。ただしそれで、いわゆる文化財になるっていう話じゃなくて、無形の何かという形ですね。それは、まだそこまでみんなお考えがないですよね。

岡田　本体のほうですけども、名勝であることで、日本で、錦帯橋のあの形態、あの技術が担保されるだろうというのは皆さん疑わないと思うんですけど、海外の人も錦帯橋のああいう伝統的な技術なり工法なりっていうのが日本の保護法上の名勝の定義で担保できているかどうかっていうことに関しては、ちょっと僕は不確かな部分があるにはあると思いますし、これは国にちょっとその辺を確かめたいなと思います

小林　そのあたりが今後の詰めどころだと思っています。実際に我々が推したいのは錦帯橋で、その形とか技術とか、そういうことがよりちゃんと認められるべきなんだけど、それを出す時の法的根拠は名勝という、あくまで橋のある区域みたいなことに今のところなってますから、そのあたりも含めて文化庁の方とお話しています。ただ、いいんじゃないのみたいな話ではあるんですよね。やはりそれは、その担当の方がおっしゃってる話なんで、また担当の方が変わると違う可能性もあります。そこら辺は今後も詰めていかないといけない悩ましいところだと思います。

　それからもう一つ。関連するんですけど、５ページ目にあります真実性のところですね。やっぱり結局最後にまたここに戻っていくんですけども、完全性のほうは、まあ大体図面から形や何かは昔とそんなに変わってないだろうということだから、その部分はある程度説得ができそうだけど、物がないのをどうするかというのは、今のところ、ここにいろいろと、実はそれ以外のことを熱心に書きました。物がないっていうことじゃなくて、デザインは、意匠はちゃんと残ってますよとか、材料の組み合わせを考える適材適所の思想というようなことはずっと担保をとりながらやっていますよとか、あるいは伝統的なワークマンシップですかね。こういうものはきちっとできる範囲でやり続けていきますとか、それから周辺のセッティング、位置ですよね、両側の町はちゃんと残ってるから、そういうふうなことを含めて基本的にはありますよという話で、それをもって真実性というところの明言としているわけですけれども。そのあたり、少し議論ができればと思っております。腰原先生、さっきの僕の話とかこの文章の中で、適材適所の思想を使ってるから、まあそれは一つの真実性なのではないかというあたりは、先生はどうお考えですか。

腰原　あの、そのあたりなんですけど、伝統木造って、伝説とか神話が多すぎると思ってるんです

けど、そんなに深く考えてないんじゃないかなと思うんですよね。深く考えてないっていうと言い方が悪いんですけど、そうじゃなくて、元々建築物っていうのは手近にあって、周りにある材料を使って必要な規模のものを生み出すっていうことが大原則だとすると、無理矢理遠くから材料を持ってきて何とかしましょうとか、入手できないような材料をっていうのは、本来の趣旨からするとおかしいんだと思うんです。だからどこまで戻るのか、戻るのは思想なのか、その思想から生まれた物を守りましょうなのか、いやいやその思想を守りさえすればいいんじゃないのってなれば、根源的な思想は自然材料として身近にある材料を使って、このスパンで橋を架けましょうというのが錦帯橋の根源だとしたら、適材適所っていうのも、現在手に入れられるものが適材であって、昔から使っているものが適材であるとは限らないわけですよね。ですから、全部何かこう、何か見えない敵と戦ってるんですよね。どう書いたらどう受け取られるだろうってなってて。錦帯橋ってこんなのなんですよっていうので攻めちゃうほうが、その後に、いやそれはちょっと、そのやり方だと応援できないよって言われたら考えるけど、もしかしたら文化庁の中にも、その作戦でいくって乗ってくれる人もいるはずだろうし。そういう意味では奈良文書自体が本来は、木造みたいなものは違う作戦もやっていいんだよと言ってくれてるはずなんですけど、それを文化庁の人達がどう理解してるかというのは、また微妙な差があるわけですよ。何か、ちょっとここのところ、こういうのを議論してて、僕は言いたいこと言って、真っ向勝負でいって、叩かれたら作戦変えるっていうタイプがよいと思うんです。やはりなんとなく、無責任に錦帯橋ってこうですよってやるのが、僕はちょっと問題があるなと思ってて、ですからそういう意味でこういうシンポジウムやってて、市民の方とか錦帯橋にずっと携わってきた人達が、同じ価値観を持って錦帯橋を思ってるんだったらそれで攻めればいいし、それを単にこう、何か申請を通すために、無理矢理直すのも何か癪（しゃく）な気がするし、ましてや世界に合わせるために変えましょうも、何か癪な気がするんですけど。まず第一段階としては少なくとも、今日お集まりの人、あるいは錦帯橋に長く携わってる人達が思い描いている錦帯橋の、今回の推薦書で言っている価値っていうものが違うか違わないかっていうことを一回やっちゃうほうがいいのかなって。違わなかったら、まず攻めてみるっていう。駄目ですかね。何かいつもこれを言って怒られてる気がしますが。そういう価値観ですると、あとは言い方次第であって、さっきの適材適所っていうのも、言い方によっては間違ってないし、言い方によっては嘘になるしっていう感じがするので。ですから、どこかで引っかかってくれたらいいんじゃないかなって。すみません、何か適当なことを。

小林　いやいや、適当じゃなくて、いつも僕らが腰原先生から怒られるポイントなんですけど、やっぱり委員長としては、何とか合格したいねというのがあって、試験対策でいうと、ここらはそれに合わせて勉強しようかみたいなところがあるんですけど、腰原先生がおっしゃってくれることは極めて重要で、最初から何度も出てきますけど、日本的木造文化の価値観というものをきちんとまとめて、それで世界を説得させればいいんじゃないか。で、落ちたら落ちた時で、みんなごめんね、で。もう一回やりますよって。極端に言うと。まあそういうこともあるのかもしれない。それで、今ここまで書きましたから、これを皆さんぜひ読んでいただいて、いや、これは生ぬるいとか、ここはこう考えていいんじゃないかというようなことは、ぜひ教えていただきたいんですよね。

　で、会場からの質問票があったんでしたかね。皆さんから。せっかくこれだけ先生方おられるん

で、もしあれなら。

（質問票差入）

小林　はい。ちょっといくつか読みます。岩国市内男性の方で、「錦帯橋は単体として世界遺産をめざすと聞いているが、両岸の町並みも大事だと思う。これがなければ橋もなかったと思うが、今後世界遺産としてはどう扱えばいいですか。」ということです。どなたかお考えがありますか。今もう錦帯橋単体でいくっていうのは、我々は出しているんですけども、そう言いつついろいろ、町並みの中に重要文化財とかあるから、町全体がやっぱり世界遺産になってほしい。それはおっしゃる通りですよね。ですけど、そのあたりどうでしょうか。

佐々木　私は別に橋のデザインばっかりやっているわけではなくて、メインは景観まちづくりとかそちらのほうなので、そちらの観点から言えば、もちろんその町並みや他の重要文化財になっている寺社仏閣を含めて世界遺産ということもあり得るかもしれませんけども、やっぱり現状は、ざっと拝見した限りとても厳しいのではないかという気がします。ですので、そもそも、なぜ錦帯橋を世界遺産にするのかを再確認したい。先ほど岡田先生の最後のスライドにありましたように、日本の文化を発信していく、あるいは未来に対してこれをベースに私達はこの町を作っていくんだっていう、そういう前向きな意思。あるいは世界にはいろいろなものがあるねってことを知って、その多様さを認め合った平和な世界、平和な人類の未来を創っていこうっていう国際感覚という、非常に素晴らしいまとめだったなと私は思っています。これらのために錦帯橋単体が世界遺産になったとすれば、当然それを発信していくためには、それを生んだ背景なり、現在も住んでいる方々が橋を支えているわけですから、その人々の暮らしがある町をもう一度立て直していかなきゃいけないと思います。その時、立て直すってどういうふうに立て直していくのか。今ある町割を全部なしにして再開発した町を造っていくことで立て直すなんてことはあり得ないですよね。きちんとした、城下の町割をベースにして、もう一度、町の再生をしていく。あるいは既にある、点としてある資産を活かしていく。そういうまちづくりをしていくことは当然のことだと思いますので、その戦術として単体で橋を世界遺産に認めてもらう。それによって当然のことながら、橋の両サイドの町、その他の資源を活かしていく。それをまちづくりの戦略として考えていけばいいと思います。

小林　ありがとうございました。そういうことです。錦帯橋は、橋だけ世界遺産になればいいわけじゃなくて、バッファゾーンとか、いろんなゾーンの設定がありますから、景観的なことを考えると、周辺全部にある種の網がかかります。それは価値の評価ということにも繋がってきますから、そんな中で、むしろ周辺の皆さんはいろいろやっていただくことがこれからたくさん出てくると思うんで、決して橋だけで他を見てないわけじゃないんで、ぜひそのあたりを御理解いただければと思います。

腰原　今の町並みだけじゃなくて、さっきの技術者育成っていう話にあたっては、錦帯橋の架け替えの時だけ技術者が欲しいではだめなので、その時のためには、町中でその技術を鍛えていく環境

が必要になるわけです。昔は、そういった町中の木造技術というもので、来るべき架け替えの時の準備をしてたわけですけど、今はそれがなくなってるわけですね。ですから、本当は技術伝承っていうのは、別に錦帯橋の工事だけではなくて、その工事をするまでの間、平常時にどれぐらいそうした人達を支えていけるかっていうのは、両岸の町だけではなくて、市内あるいは県内で、そういった技術者の修業の場を作っていくっていうことが重要になります。物だけではなくて、人の育成っていうのも、周りの人達が絡んでいかなきゃいけない話なんで、その辺もさっきの確保という意味ではやっていただかないといけないのかなと思います。

小林　確保の中に入ってる。皆さんわかりますよね。例えば、半分冗談だけど、僕ら半分真剣に言ってるのは、犬小屋だって伝統工法で発注してくださいと。そしたら大工さんはそれで造る練習にもなっていくし、そういうのが定常的にあれば、若い人達がいろんな伝統工法を勉強することが可能になります。今のままだったらやっぱりもう、普通の家と錦帯橋で使われている技術がもう全く乖離してしまっているから、そのあたりはやっぱり岩国全体の一つの、錦帯橋を愛するならそういうところをやっぱりどう担保していくかというのは、今後かなり重要な問題になるんじゃないかなと思ってます。

本田　山口県にもあると思いますが、一つの事例として、石川県には職業大学校っていうのがあります。そこで、家具屋さんとか、大工さんとか、石屋さんとか、様々な業種から当然若い人も含めて、訓練大学を作っております。２年ぐらいの研修です。そういう研修をやって、石川県の場合は、ずっと年度計画で本物の木造のお城をずっと再現しております。そこに、伝統技術を活用していくということをやっております。ですから、山口県にもあると思いますが、それらをぜひ勉強していただきたいと思います。

小林　はい、参考に考えてもらえればと思います。それでは、皆さん方に一言ずつ最後にコメントをいただければと思いますが、その前に一つ、最後の質問を岡田先生にしたいです。「錦帯橋が世界遺産になる近道はありますか。そのために、市民は何をすればいいですか。」市内の男性です。先生、いろいろあると思うんですけど、御講演の最後に国際シンポジウムの重要性をおっしゃってましたけど、そのあたりどうお考えですか？

岡田　どっちかというのはわかりませんけども、ぜひ必要なこととしては、海外に良き理解者を得る。その早道としては、この分野の有力者といいますか、リーダーのような方を何度かお呼びしてわかっていただくというのが一つ。

　それからもう一つ、課題としては、これは現実的な問題として、暫定リスト入りをしないといけないんで、そのためには、将来ライバルになるかもしれませんけども、暫定リスト入りを本当に熱望してる自治体があちこちにあるわけで、その辺で手を携えて、中央に圧力をかけていくということは必要だと思いますし、文化庁の担当が３年くらいで交代してしまうと、そんな面倒臭いことは先送りしたいという気持ちも働くだろうし、また、３年後に文化庁がそっくり京都に移ってしまうような事態になったら、ややこしいことになると。そういうことも含めてですね、いろんな言いわ

けが中央のほうにあるというのがありそうなんでね、それを乗り越えて暫定リストを早く作り替えてもらうためには、やはり相当な方面から取り上げて、催促する、督促するというようなことが現実的には必要なんだろうと思います。

小林　ありがとうございました。残り時間わずかですけども、この概要版の文章を読んでいただいた先生方に、コメントと言いますか、今後こうしたほうがいいよとか、あるいは頑張ってくださいというエールも含めて、一言ずつお言葉をいただければと思います。それでは、本田先生からでいいですか。

本田　評価が難しい技術の伝承の件です。技術者は評価対象にならないと言いますけども、それが伝承して、しかも三百何十年と継続されていることに対して、それを一つのアピールと言いますか、もう少ししっかりと、また謳ったたほうが良いのではないかと思っています。

小林　ありがとうございました。佐々木先生、お願いします。

佐々木　さっきの話にも通じるんですが、なぜ錦帯橋を世界遺産にしたいのかという、そこですね。岩国にはまだまだたくさん錦帯橋以外にもまちづくりとしてポテンシャルがありますのに、それをちょっと活かしきれてないところがあるのかなと、短い時間で拝見した中で感じております。でも、その中で、昨日の橋の上での合唱とか、篝火とか、芸術祭としてこうしてやっていらっしゃる活動というのは、とても素晴らしい一歩二歩三歩だと思っていて、どうやって自分達の町をみんなが使うか、楽しく使っていくか、盛り上げていくかというヒントは、直接錦帯橋の世界遺産に結びつく行動に思えないようなことでも、たくさんあるような気もいたします。なので、技術の伝承、先ほど犬小屋でもっていう話もありましたが、錦帯橋の入り口のところにいっぱい立っているサイン類ですね、あれもちゃんと木で組んだものを立てるようにしていこうとか、今日 10 分ぐらい時間があったのでお土産屋さんに行ってきたんですけど、その中に木を組み立てて何かを作る錦帯橋の簡単な模型をお土産物にしていくとか、いろいろなことをしながら、岩国のこの城下町が、かつて本当に賑わっていた文化の高い町であった、その誇りと、そこに蓄積している文化を形にしていく様々な取り組みを同時多発的にやっていくということと、解釈とか戦略とかを決めながら錦帯橋を世界遺産にしていくっていうことを両輪で進めていくことが、岩国のまちづくりにとって一番大事なことではないのかなと思っております。

小林　ありがとうございます。腰原先生、お願いします。

腰原　今日の話でずっといろいろな言葉がキーワードになって思いついたというか、考えさせられたんですけど、先ほど、木と石と金物を使ってます。それからこれはアーチ構造なのか刎橋なのかって。で、よくよく考えてみると、さっきの４ページのⅳの、「その集合体」っていうのそれなんだと思うんです。やっぱり、この時代ってもしかしたら、ある程度建築技術とかいろんな技術が整備されてきて、さあ、それをどう組み合わせて違った新しいことをやるかという時代だったのかな

と思い始めたんですけど、もしそうだとすると、同じ物って造らないんですね、大体。新しい技術をやりたい人達って、既存の技術を組み合わせてどうやって独自の技術を創り出そうかということを考えるわけです。愛媛で錦帯橋を参考にしたっていう図面があるんですけど、似てるといえば似てるけど実際には全然違うんですよね。技術的にはちょっと錦帯橋っぽいんですけど、見た目は全く違って、これを錦帯橋と一緒ですって言われたら、たぶん違うって言っちゃうんだけど、でも、要素技術の組み合わせによって新しい架構システムを創るのか、さっきの純粋なアーチではない、純粋な刎橋でもない、何だかよくわからないけど合理的なものを生み出すっていうのは、これは知識の集合体、建築的には統合学っていうんですけど、そんなに高度な技術は要らないんだけど、ベースになる技術をうまく組み合わせることで新しいことが生み出されるんだってすると、もしかすると錦帯橋というのはそういう位置づけで考えられるのかと。刎橋の延長線なんだけど刎橋じゃないし、アーチの前身なんだけど完全なアーチでもないしっていうような見方をしていくと、もしかしたら他にもこの後に続くいろいろな技術というのが、統合学とか集合体としての技術というのを生み出したきっかけになるというような評価ができると、結構説明しやすいかなという気がしました。

小林　ありがとうございます。非常に面白いアイデアかなと思って、今後少し議論できたらなと思いました。はい。岡田先生、最後にやっぱり、どうやったら世界遺産になれるか教えてください。

岡田　方向性としてはね、技術の凄さとか、ユニークさとかを主張していく。それが軸になるんだと思うんですけど、今、腰原先生もおっしゃいましたけど、その技術の背後にある人ですね。世界遺産に関わる人達、あるいは世界遺産委員会なんかでは、物と技術に人が付いているという、そこを評価するんですね。だから、一つには、人の関わり方としては、その技術を持っている人達が、あるいはどういう技術が錦帯橋に集約されたのかっていうことと、もう一つは、錦帯橋の作品としての見事さは、どういう人達が愛でる芸術作品なのか。北斎とか広重とか、そういうところにどう影響されていったのかということが、その波及的な人間の活動、芸術とともに錦帯橋を通じてどうだったかっていうこともあるので、これからは、史料の発掘っていうのももう少しやっていかないといけないんじゃないかなと思います。

小林　ありがとうございました。さっきの「人」の話ですけど、昨日、橋の上の合唱会を聴かせてもらって、錦帯橋って舞台でもあるんだということに気付きました。それから、最も良い展望場所でもありますよね。それから錦帯橋って、世界遺産になろうが何になろうが、立入禁止のものになったら駄目で、やっぱり常に渡り続けて、人がいて渡り続けているっていうことが大事だし、そのためには、まさに皆さんが、ここに存在し続けるっていうことが何より重要なことだと思います。錦帯橋っていうのは、やっぱりまちづくりの最大のイベント、錦帯橋を世界遺産にすることがそうだし、世界遺産になるのが一つのイベントであって、それが終わろうが何しようがずっと続く。岩国のまちづくりのポイントですよね、まさに。旗印というか象徴であって、そういうことを考えると、ならなくてもいいかなっていうとまたここで怒られますから、なるように頑張ろうと思います、我々も。それで、今後の推薦書の作成というのは時間との戦いになってくると思いますから、走り

ながら考えます。考えて止まってたら駄目だから、走りながら考えます。むしろ稚拙なものを積み上げていくことが大事かもしれないと思うところもあります。ですから、少しずつ皆さんの御意見や、今日４人の先生、腰原先生はずっと付き合ってもらってますけど、３人の先生もここまでおっしゃって、明日から来ないというわけにはいかないでしょうから。またいつか何度も何度も来ていただきたいと思います。

（会場拍手）

小林　ありがとうございます。ぜひ今日を境に、いよいよ一点攻勢で我々は文章を作って頑張りますので、皆さん協力を。いろんなことができそうです。文化庁に圧力をかけるとまたすぐ圧力かけてきたって言われますけど、程よい時に圧力をかけに行きたいと思いますので、そういうことも含めて、今後とも益々やっていきたいと思います。御協力よろしくお願いいたします。本日のシンポジウムはこれで終わりにしたいと思います。どうもありがとうございました。

閉会挨拶

錦帯橋世界文化遺産登録推進協議会委員
岩国市教育委員会教育長　　佐　倉　弘　之　甫

御紹介いただきました岩国市教育長の佐倉と申します。

シンポジウムの閉会にあたりまして、一言御挨拶を述べたいと思っております。御登壇いただきました先生方におかれましては、特に小林先生におかれましては、素晴らしいコーディネートをしていただき、ありがとうございました。長時間にわたり、貴重なお話、それから率直な御意見、御提言をいただきまして、誠にありがとうございました。錦帯橋の世界文化遺産登録に向けた現状や、錦帯橋のＯＵＶについて、それぞれの専門の視点から貴重な御意見をいただきました。厳しくもあり、率直で、私達の胸にというか、想いに応えるものであったというように、思っております。

教育委員会の立場として、一言申し上げたいと思っておりますが、私達は教育の場で、こうした錦帯橋について、子ども達に伝える術として、様々な取り組みをしております。

この近くの小学校では、１年生から６年生までプログラムを持って、６年生になったら、錦帯橋の『こどもガイド』ができるというふうなところまでプログラムを持っておりますし、近くの中学校では、修学旅行に行くのに、英語で自分達がチラシを作って、京都、奈良、そうしたところの外国の観光客の方にチラシを渡しながら、錦帯橋をアピールする。そうした中には、広島まで、宮島まで行こうと思っている方が、そんなに素晴らしいなら錦帯橋まで足を延ばそう、そうした方もおられたというように聞いております。

昨年、数学の授業では、私もあまり詳しくはないのですが、錦帯橋の寸法を測るとともに、宮島に錦帯橋を架けたら何メートルで、どの高さだったら美しくなるように架かるか、カープが優勝したマツダスタジアムに錦帯橋を架けるとしたらどうなるか、というのを数学の授業で取り組んでいるとか、高校の授業では、プレゼンテーションをですね、アクティブラーニングという形の中で取り組んでいる。そんな様々な取り組みをして、錦帯橋を身近に感じながらですね、その素晴らしさということを子ども達に伝えているところでありまして、今日のような話を中学生であれば充分に聞いてですね、理解してくれたのかなというふうに思っておりました。また機会がありましたら、私の言葉でですね、市内の中学生に話してあげたいと思っております。

来年度には、先ほどお話がありましたように、錦帯橋の世界文化遺産登録に向けて、より良い提案書を作りたい、作っていくということでありますので、この錦帯橋の価値について、世界に向けて発信していくことが大変重要だということで、この提案書には大きな期待をするものでありますし、共に作っていきたいというふうに思っております。

終わりになりましたが、本日御登壇いただきました、先生方の益々の御活躍と、御参会の皆さんの御健勝、御多幸を祈願申し上げまして、岩国の誇る、山口県の誇る、日本の誇る錦帯橋を世界遺

産登録できるように皆で力を、知恵を合わせて、取り組んで参りたいというふうに思いますので、どうかよろしくお願いいたします。

参考資料

錦帯橋世界遺産登録推薦書　概要版（案）

1. 資産の概要（OUV）

本資産は、17 世紀初頭の木造技術によって成立した独創的なアーチ構造と美しい姿を継承した類い希な事例であり、この点において顕著な普遍的価値を有すると言える。

「錦帯橋」は、幅約 200 メートルの錦川を渡すため、石敷の護床工がまもる中央４基の橋脚、両岸の橋台に、中央３つのアーチ橋、両端２つの反橋を架けた５連橋である。

この「錦帯橋」は、日本が戦国期から 17 世紀の江戸泰平期へ移行する中で築造されたもので、戦時の城郭建設などを通じて頂点を迎えていた武士団の土木・建築技術が、平時の技術に転換したことを示す科学技術の集合体の一例である※1。その技術の核心である「錦帯橋式リブアーチ」と呼ばれる構造は、束ねられた小径木材（直材）を巻き金で補強したリブアーチを主要構造体とするもので、木造アーチ橋では世界で唯一の構造である※2。巻き金で束ねることで小径木材間のモーメントを解放し軸力のみを伝えるこの構造システムと、身の細いアーチ橋の揺れを抑える鞍木と助木による制振システムは、35.1m という当時の木造アーチ橋としては破格の径間を達成すると同時に、滑らかな曲線を描き出し、顕著な機能美をみせている。

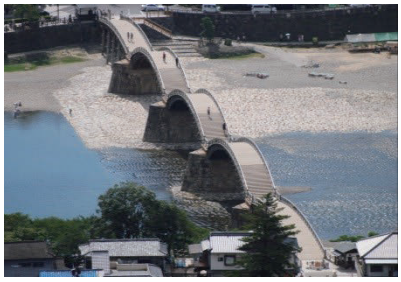
急峻な城山は、多種の照葉樹で形成される豊かな自然林として 17 世紀から保護され、その城山を背景に３連アーチが４つの石積橋脚を次々とわたり、石敷の「護床工」に覆われた清流錦川の浅瀬に映り込む姿は美しい※3, 4。その類い希なる錦帯橋の景観美は、参勤交代や旅行者によって徐々に世に広まっていき、19 世紀初頭には、海外にも影響を与えた葛飾北斎や歌川広重などの「浮世絵」に描かれるなど、名所としての地位を確立した。

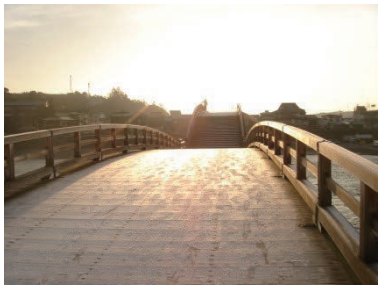
この比類なき構造をもつ木造アーチ橋は、初代橋流失後３度目に当たる 1699 年の架替えの際に描かれた現存する最古の図面を始めとし、その後に描かれたものを含む近世の計 12 枚の図面および近代以降の図面を継承し、これらを元に伝統木造技術で架替えられ続け、1950 年のキジア台風まで、実に 276 年間流されることはなかった。そして、すでに近代を迎えていたこの流失再建の際にも、地域社会は車社会に便利なコンクリートや鋼材の近代橋ではなく、その美しい木造アーチ橋を選んだ※5。

2. 登録基準

i. 人類の創造的才能を表現する傑作

錦帯橋は、地形的歴史的な条件と制約の中で生みだされた世界で唯一無二の独創的ですぐれた美的構造物である。両端に反橋をもつ３連アーチの木造錦帯橋は、橋梁形態としても稀有な存在※4 であり、永く人々の好奇の目を惹き続けてきた。清流の錦川や周辺の緑の山々および点景となる城山山頂の天守閣などを背景として構成される景観は、遠景・中景・近景と、視点場の変化とともに、その姿と造形美を楽しむことができ※3、わが国を代表する名勝景観にもなっている。





こうした錦帯橋の美は、この橋の優れた構造と美へ愛着をもつ人々が、時代環境の変化を越えてなお、330 年以上にわたって全く同じ形の橋を架替え続け、渡り続けてきたことによって証明されるのみならず、海外に影響を与えた 19 世紀後半の葛飾北斎や歌川広重などによる「浮世絵」にその橋梁そのものが対象となって数多く描かれていることが証明している。

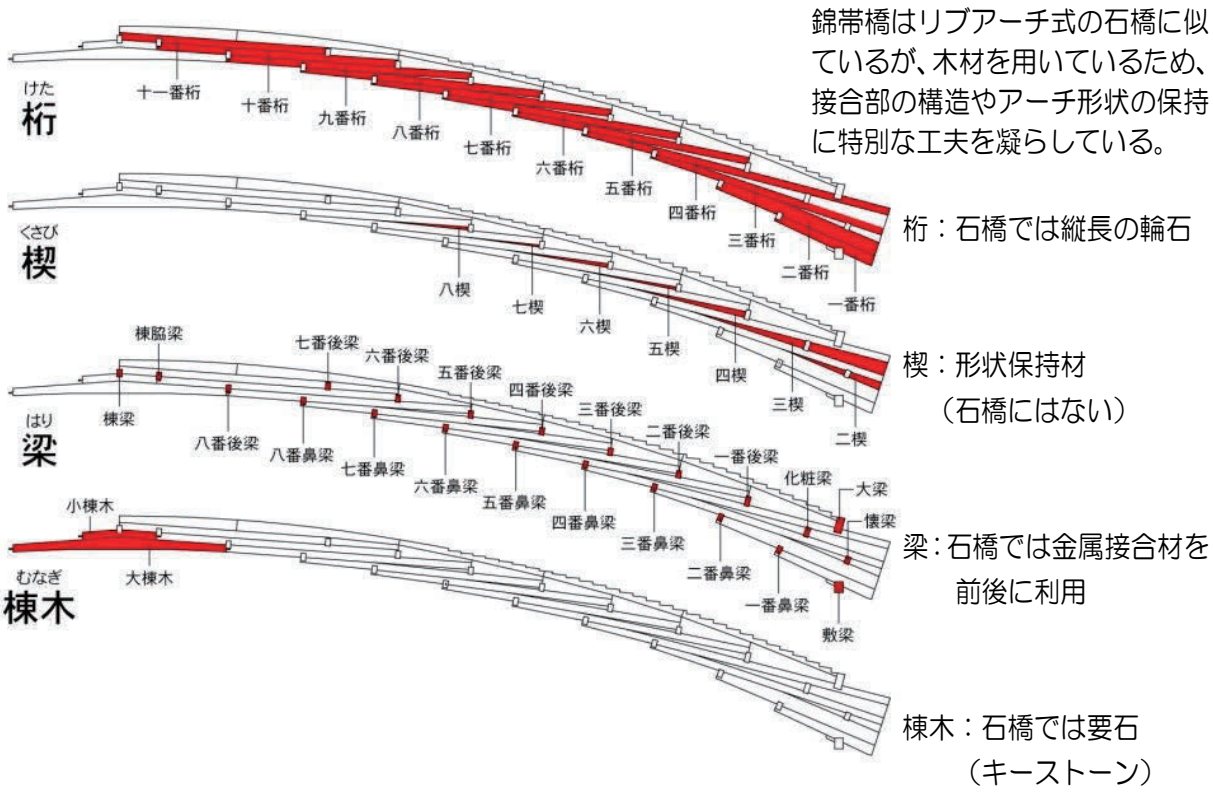
歌川広重
六十余州名所図会 周防岩国錦帯橋
所蔵／岩国徴古館

ⅳ．人類の歴史上重要な時代を例証する建築物、その集合体、科学技術の集合体、または景観を代表する顕著な例

戦国の世が終わり各地で現代につながる都市の基盤がつくられた 17 世紀、川を渡るという人類共通の課題に対して、岩国領が選んだ答が、城壁石積技術による堅牢な橋脚と日本古来の建築材である木を主構造材に用いた橋梁、それらを組み合わせて建造する両端に二つの反橋を持つ三連の錦帯橋式リブアーチ構造※2 であった。この構造形式が確立されて以来、他の多くの橋がコンクリートや鋼材の近代橋になっていく状況にあっても、岩国の人々は錦帯橋を選び続け、その姿を変えることなく現在に継承している。

錦帯橋式リブアーチ構造

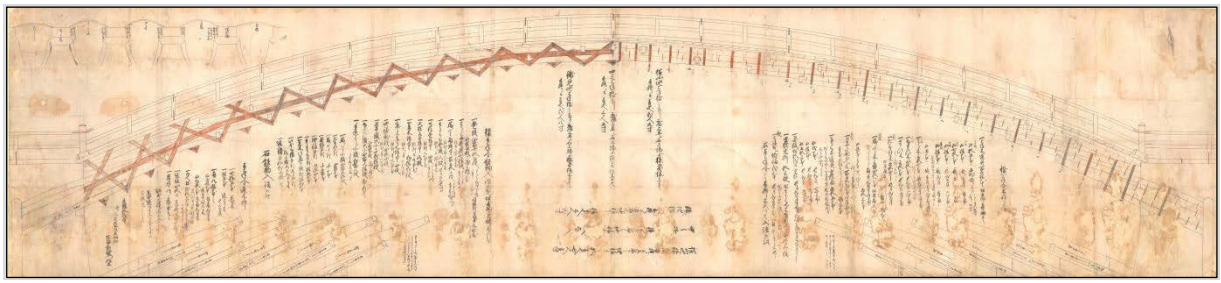
束ねられた小径木材（直材）を巻き金で補強したリブアーチを主要構造体とする。



3. 完全性の言明

錦帯橋は、石敷の護床工および石積で築かれた２つの橋台と４つの橋脚、そして木を主

構造とする２つの反橋と３つのアーチ橋から構成されるが、これらは全て、(おそらくは創建当初から)少なくとも 1699 年の架替え時の姿を確実に留めており、高い完全性を有する。



錦帯橋掛替図面（1699 年） 所蔵／岩国徴古館

4. 真実性の言明

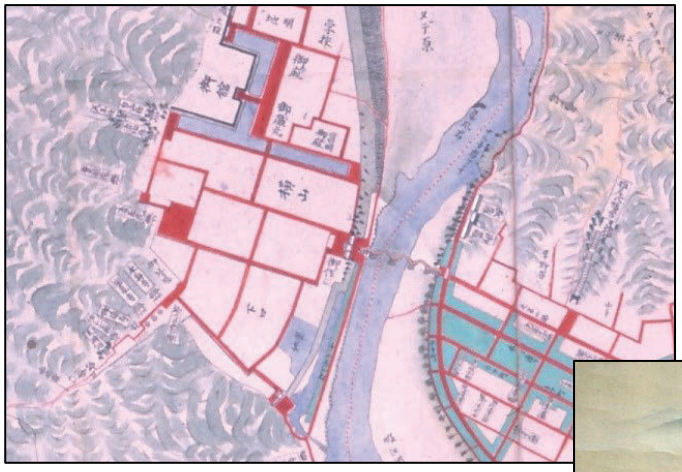
錦帯橋は以下に述べるように、デザイン（形状、意匠)、マテリアル（材料、材質)、ワークマンシップ（伝統、技能)、セッティング（位置）のすべてにおいて高い真実性を維持している。

1699 年に錦帯橋の架替えがなされた際の図面を最古とする 12 枚の図面と近代以降の実物大「型板」が保存されており、それらにより、木を組んでアーチ橋をつくるデザインの真実性は証明できる。

架替え時に使用される木材は、一番桁や二番桁、大棟木などの主要構造材、また橋板や高欄などの化粧材にはヒノキ等の腐食しにくい材を、また、他の構造材や補強材にはマツ等を用いるというように、適材適所の思想の下、その材の性質や経済性、調達可能性に応じて合理的に選択されてきたことから、創建当初から一貫した、使用するマテリアル選択の思想性（コンセプト）の真実性は証明できる。なお、錦帯橋が選択し続けてきた無垢材は、その橋梁という性質上、風雨による経年劣化は避けられず、腐朽材を更新してきたため当初材は残っていない。

架替えを契機とする棟梁による度重なる作図は、映像等の記録保存がない時代に考えられる技術伝承と言え、300 年前と変わらぬ錦帯橋の架橋技術を現在に伝えており、これは、アーチ橋を木造でつくるというワークマンシップにおける真実性を証明している。

セッティングについても、近世の古地図で検証すれば、創建時から現在まで変化がないのは明らかである。また、浮世絵に描かれてきた錦帯橋の背景となる景観は良好に保全されている。さらに両岸の町並みである上級武家地であった横山地区、武家と町人の町であった岩国地区の景観はその特性を良く継承している。



旧岩国領図（1867 年）
所蔵／岩国徴古館

錦帯橋図
所蔵／岩国徴古館

5. 保護と管理に必要な措置

資産は、文化財保護法に基づき指定された名勝として良好に保護されている。また、緩衝地帯においては、都市計画法に基づき指定された風致地区、景観法に基づき指定された景観計画区域内の横山重点地区、岩国重点地区、森林法に基づく保安林として、適切な保全が行われている。

※1：戦時技術（築城技術）が平時技術（橋梁技術）に断絶なく転換したことを示す（科学技術の集合体の希有な）見本

関が原の戦い（1600〔慶長 5〕年）で岩国に移封された吉川家は、山陽道と海岸線に近い経済・交通上の適地を選び、三方を山に囲まれ、その谷間を蛇行する錦川に縁取られた急峻な山（城山）と河岸段丘からなる横山に中心を定め、来たるべき戦に備えた。山上に要害を築き、錦川を外堀に見立てて東麓に政治の中枢機関を配置し、より高い防衛機能を発揮させた。しかし横山は狭隘であったためすべての統治機能を集約できず、大半の家臣が暮らす屋敷地、寺町や町人地といった他の城下町機能は、外堀である錦川を隔てた東の錦見に配置された。この時点では、錦川に架かる橋は、戦時には壊しやすいこと、つまり「流されてもよい橋」であることが重要であった。

ところが、一国一城令（1615［元和元］年）により、岩国城は破却され、その後の幕藩体制の確立により、狭隘な戦時の城下を平和時にも使い続けることとなった。意味的な都市機能として、錦川は敵の侵入を防ぐための外堀から対岸の町と繋ぐ内堀となった。このため城下町の一体的な統治を可能とするには、象徴的にも実際的にも「流されない橋」が不可欠となる。こうした必然性から 1673［延宝元］年に誕生した「流されない橋 錦帯橋」が、岩国城下町を完成させたといえる。

錦帯橋の「セッティング」は、この地形と防御的都市の平時における土地利用とその要素としての城山、河岸段丘、錦川、山上の要害、横山と錦見の両町との関係から理解でき、そこに錦帯橋という象徴的で実際的な結節装置が不変に配置されていることが重要である。

世界で唯一の構造である「錦帯橋式リブアーチ」（※2 で後述）を完成させた技術は、長く続いた戦国の世に鍛え上げられた戦に勝つための技術、すなわち近傍で入手可能な石材や小径木材（直材）のみを用いて短期間に築城する武士集団による普請（土木）と作事（建築）の技術であった。錦帯橋は、太平の世が訪れる中で、前時代の軍事技術が生かされている点が希少かつ重要である。さらにはこれを、地域の技術者たちが今日まで 300 年以上にわたって継承してきたことは特筆すべきことである。

- 以下、文化庁歴史的建造物調査研究会編「建物の見方・しらべ方　江戸時代の寺院と神社」（ぎょうせい 1994）より。

「大規模な建設活動の背景には、城下町建設も城郭建設や町割といった基礎的な基盤整備が一国一城令（元和元年：1615 年）以降には峠を越し、従事していた多数の土木建設技術者が、寺社建築という新たな事業に参入できる状況となった事情もある。

さらに、寛永期を中心とした三代将軍家光の治世下（1623～51）は、未曾有の建築ラッシュとなる。家光政権下で、本山級の大寺院は復興・新設を終え、境内構成の枠組みは完成する。この後は、個々の建築の新規建設・再建はあったが、境内構成自体を根本的に改変することは少なくなる。

この頃までに、幕府主導で実施された大規模な寺社境内の建設工事は、江戸城下町建設と類似した方法で進められた。全体計画作成の後、区画或いは建築ごとに諸大名や旗本を割り当て、費用や労働力の調達を行う方式である。これは、寺社境内の建設が「公用之造営」として認識された公共事業だったからである。

寛永期を過ぎると、諸大名は領国経営に専念するようになり、それぞれの領国の中で中心となる寺社の新規造営を進めていく。各大名による寺社造営も、幕府による造営と同様に 17 世紀中期ごろに量的なピークを迎える。」

※2：世界で唯一の構造を持つ木造アーチ橋であることの証明

錦帯橋はアーチを主構造に用いた橋であり、ヒンジ端をつくり出す「隔石」（1950 年以降弾性固定端の「沓鉄」に変更）により、受けた支点部に生じる鉛直・水平反力を軸力に転換することで、アーチを構成する各部材に作用する曲げモーメントを軽減する構造となっている。

錦帯橋でアーチ形成に使われる部材は、石造りアーチの場合とまったく異なる。石橋アーチ橋では、ブロック形状のものを横に並べ、隣り合う石同士を密着させ、ずれないようにすることが大事である。それに対し、一つの桁部材が約 6m から 8m と長い錦帯橋では、軸力をわずか一辺 170ｍｍ足らずの矩形断面で伝えることは至難の業である。このために考えられた技が、桁材の端部を鼻梁と後梁とで密着させることであった。桁材を 1 つなぎで伸ばしていくことは難しいため、上にのる桁部材を 3 分の 1 ずつずらしながら巻金で結んでいった。ずらしながら、先頭と後ろに横梁を用意して、そこで軸力を伝える。軸力が卓越し、ずれが小さくなるようにずらし、角度を変えながらずらしてできた桁の隙間はクサビで埋めており、アーチになった時に、良い形で圧縮力を伝えている。

これらの特徴から、錦帯橋のアーチ形式は、「錦帯橋式リブアーチ」と呼ぶしかなく、世界の他の木橋に類を見ない。

さらに、ヨーロッパにおいて扁平な石造アーチ橋を実現したのは 18 世紀末であるのに対し、錦帯橋では 130 年も早い 17 世紀末に木造によりそれを達成していた。

なお、歴史上で知られる木造アーチ橋で最も古いものは、105 年にドナウ川にかけられたトラヤヌス橋であり、スパンは 51m、橋長は 1,200m 以上であったとされる。しかし、橋梁本体は失われており、橋脚のみが現存している。また、日本においては、寛永 11（1634）年の長崎眼鏡橋の架設にみられるように、アーチと言えば石造アーチ橋であった。木造アーチ橋は、同程度の曲率の湾曲材を揃えることに難点があったため、全く異なる曲率で発想された錦帯橋を除けば、湾曲集成材が登場するまで一般化していない。

以上より、錦帯橋式リブアーチという独特の構造が世界の木橋史およびアーチ橋史に占める位置は極めて特異であり、錦帯橋は顕著な普遍的価値を有すると言える。

※3：景観工学的にみる錦帯橋の景観美

錦帯橋は、景観工学的にいえば遠景・中景・近景と、視点場の変化とともに、その姿と造形美を楽しむことができる。

遠景では山々を背景とした全体景観の中に重厚でがっしりした石造橋脚の上に優雅で軽やかな木造アーチがのる。横山の天守閣にのぼって、岩国市の市街地を背景に蛇行する錦川をまたぐ錦帯橋の俯瞰景観も魅力的な眺望景観になっている（この錦帯橋の借景となる城山は、江戸時代初期以降の伐採禁止措置により、多樹種で形成された自然林であり、この地が北限とされる暖地性樹木も見られるなど豊かな照葉樹林である）。

中景では、橋そのものが景観の主人公（主題）になる。橋を構成する石造橋脚の表情や木造アーチの主桁や高欄などのフレームワークが視野の対象となり、構造部材の特徴が読み取れる（城山と清流錦川が生みだす自然美と、錦帯橋の精緻な木組みの機能美は完全に融合し、川に映りこんだ姿をはじめ、四季折々の景観美をつくりだしている）。

近景になると、橋のディテールに目が届くとともに、河原に降り立って下から眺める仰瞰景を楽しめる。

以上に加えて、朝昼晩の時間変動や、雨雪などの気象状況、春夏秋冬の季節変化など、錦帯橋の景はさまざまに変化するとともに、そこに美が生まれる。このように一年中、四季折々、いつ行ってもまたどこから見ても、美しさを裏切らない橋が錦帯橋である。

※4：世界的に類例のない立面を有する複合の 5 連橋

石造や鉄製の橋面が平らな多連式のアーチ橋は世界に数多くあるが、馬車交通が発達しなかったわが国の地理的・歴史的な背景が作用して、錦帯橋のように 3 連の円弧状のアーチが立面的に連続する橋は世界的に類例がない。しかも両端は、ゆるやかなカーブを描く反橋を配して、3 連アーチをリズミカルに水平地盤面へと誘導する。材料の醸し出すどっしりとした石造橋脚の硬さと重量感、軽やかに飛翔する木造主桁の柔らかさと軽快感との相反する材料と構造がひとつの構造体として統一されている。

※5：人を安全に渡し続けてきた生きた遺産（living heritage）としての価値

錦帯橋は、「人を安全に渡す」ことを最優先課題として使われ続けてきた。江戸時代、城下町の中心に位置し、武士や許された御用商人のみが渡った錦帯橋は、武士の支配が終わった世となって以降は、地域住民の生活道路や子供達の通学路としての役目を担うこととなり、また渡橋する観光客を楽しませている。この名勝地には、現代でも、その景観美を楽しむために年間 61 万人の観光客が錦帯橋を渡っている。

1674 年に初代の橋が流された後、護床工を広く敷くことで橋脚周辺を固め、さらにその後、鞍木と助木で橋梁を補強することによって、この唯一無二の構造形式を完成させた。加えて、洪水時に両脇の反橋である柱橋の橋杭組が流れるようにつくることで、橋梁全体が流されない工夫を施した。この反橋 2 橋とアーチ橋 3 橋を組み合わせ、「流されない橋」として機能させているのである。

1950 年の流失では、創建時から 276 年間不動であった空石積橋脚が崩れたことから、修理時には、橋脚や護床工にコンクリートを使用し外観を保存しつつも、より安全な「流されない橋」とした。

【発　行】
錦帯橋世界文化遺産登録推進協議会
【ホームページ】
http://kintaikyo-bridge.jp/
【お問合せ先】
岩国市　産業振興部　錦帯橋課
〒740-8585　山口県岩国市今津町一丁目14番51号
（電話）0827－29－5107

KINTAIKYO-BRIDGE